
奇妙な物語 どこか間違った僕らの<世界>

カミキリ丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇妙な物語 どこか間違った僕らの<世界>

【Nコード】

N2903P

【作者名】

カミキリ丸

【あらすじ】

仮想現実空間<シェアワールド>、ゲーム内ではキーアイテム・マテリアルがキャラクターの全てを左右する。これは薬草師の少女とその他大勢と、その他危険人物との交流を描いた壮大でもない物語の一部である。

警告タグは念のため、あっさりばっさりですよ

0 個目 まずはログインしました（前書き）

初めての作品となりますので、荒くつまらないものではありますが、少しでも時間を潰すことが出来ますように、と

0 個目 まずはログインしました

ーログインー

世界を移るとき特有の音声の流れで私は目を覚ます。

眼を開けても景色は揺れたまま、ぼやけたまま、意識ログイン転移特有の倦怠感に苛まれる。

その感覚を振り払うように頭を振りながら周りを見渡し、前回の就寝前アウトに枕元においた眼鏡を手にする。

「……相変わらず頭痛いですねえ、コレ」

ようやくクリアになった視界で世界を再認識…ただ首を振って見回してるだけなんですけどね。

今日も頭痛から始まることになってしまっただけ少し気分が沈みますけど、その分こっちで楽しめば帳消しですよ？

「最初の頭痛さえなければこっちは最高なんですけど…けどけどー」

ぶつぶつ言いつつも前日の夜に汲んでおいた水桶で軽く顔を洗い、寝汗をかいた身体を濡らしたタオルで拭っていきます。嫌な汗を残さぬように体中念入りに、丹念に、少しだけ重い胸元から首、お腹に両腕、両足まで隅々まで…この辺りゲームとは言え手間かけないといけないのは仮想現実が進んできたってことでしょうか？まあ、全然いらない仕様だと思いますけど。

「身だしなみは…か・が・み、かーがーみ…っと、問題なしですね？」

透き通るほど色白な肌に深緑のストレートヘア、絶世とはいえませんがそこそこ整った顔立ち、そして長く伸びた耳。此処での私は森の民の薬草師、と言うことになってます。ゲーム的にもうすこし馴染み深く言い直すのであれば「種族：ハーフエルフ」の「職業：ガ―デンマスター」…要は後方支援タイプですね？

あ、失礼しました。その前に今いる世界から説明しないといけませんね。

此処は仮想現実空間【シェアワールド】と言って、現実世界から直接意識をワールド内の自分の設定したキャラに落とし込む…つまりはゲームの中に入ってあそぶMMORPGみたいなものですね。難しいことは私も読んでないのですが新世代のゲームとかなんとか言うだけあっていつでも人で賑わっています。

ただ私のいる森のワールドは野生動物や獰猛な肉食生物も多数存在してますからエルフ族以外は高レベルな方が自分強いと思ってる人しかいませんけどね。自信満々で森に入って即座にGホーネツトに攫われていった冒険者の例もありますし・・・エルフには静かで良い所なんですよ？種族としての特性として森でNPCには襲われませんから。

で、ですねー 私は森の中でもエルフとハーフエルフにハイエルフが集まった集落に住んでいます。他にも一種族ずつ別れた村やダークエルフが住む村があるのですが、エルフの商人によって物流が確保されてるこの町が一番安全で楽なので、住み着いてしまいました。

後はキャラクターですが全身サンプルから選ぶもよし、ある程度の自己理想を反映できるので空想だけ自分のなりたい姿になって見たりとか…雑誌のモデルを見て私もコレくらいあれば、なんて嘆いてみたりしてた部分を大きくとか。

あ、私はしてませんよ？してませんからね？ やってその虚しさに

気付きましたから…

こほん、気を取り直して説明を続けます。

先ほど私の居る場所を森といいましたが、コレはその場所の地形によつて名前が決められています。

凄くそのままですね？物凄く森が深いから森のワールドなんですよ？

運営に言つて考えてもらつたほうがいいでしょうか…

他にも街、城、海、空、砂漠、戦場…とにかく色々なワールドが存在していますが、私は森から出たことありませんので詳しい説明はこれまた省かせていただきますね

（え、作者が考えて無いだけ？其処は言わないお約束ですよ、お客さん♪）

後は何がありましたか…メモ帳メモ帳…あ、このゲームの目的とマテリアルについてですね。

このゲームはよく言つて自由度の高い、悪く言つと何をして良いか分からないほど漠然とした世界なんです。個人レベルやマテリアルの開放レベルを上げるもよし。一般人Aとして仮想現実での人生を作ってみるもよし。ついでに精神を鍛える場所としても使えちゃうのですよ。

えと、今言いましたマテリアルとゆーものですが自分の種族を決めたりゲーム特有のスキルを使うために必要なとーっても大切なもののなんです。

大体皆さん2〜3個は保持してますね、私もハーフエルフ、ハーフクリエイト、ソイルチャージの三種類を持ってますし。

ただ、コレは殆ど木々の生長にしか役に立たないものなので中々使いづらいんですけどね…

…一応これで最低ランクの知識は語れたでしょうか？まあ、説明忘れは後で補足していきますね？

寝巻きから動きやすい密着型のスク水モドキもといエルフ用の装備としていただいたピタピタスーツに

着替え、弓矢とマテリアル3種をもって部屋の外へ。

「では今日も元気に花壇の材料探し、いってきま〜す！」

二個目 未知との邂逅、ですよ

深い森の中にて

夕暮れ特有の湿気をはらんだなまぬるい風、鬱蒼と生い茂った木々の葉によつて昼間よりなお暗い森の奥で……人間なんて丸呑みできそうなおっきな狼さんと心温まらないふれあい体験中です。

基本的にエルフに優しい森ワールドですけどあくまでエルフとハイエルフの方々だけなんですよね。私は混ざり者なので強いNPCだと効果がなかったり…ああ、コレがハーフの宿命と言うものなんですか！

と言うわけでとても大きい狼の群（一、二匹じゃ有りませんよ？桁が違います、桁が）から逃げ回りながらですが、皆さんこんにちば

何故追ひ回されてるかといいますが、お恥かしい事ですがこのゲームを始めて半年、未だに森の中で迷子になることがあります…今日もその稀な事態なうえ既に日も暮れ始めて急ぎ集落に戻ろうとしたのですが、途中の穴倉からちようど狩りに出かけようとしていたGウルフ、今追いかけてきていてつかい狼達と鉢合わせてしまいました。とつさに匂いのキツイ薬草をクリエイトして爆発させなかつたら今頃お腹の中であんなに焼けていたでしょうね。

しばらく鼻は使えないようにしましたが、耳は健在の為あまり近づくかれないようにこそそと木の枝を伝つて移動中です。この木の上だつて必ずしも安全じゃないので誰でも良いから助けが欲しいのですが叫んで助けを呼べば狼だけでなくこの森の肉食動物がわんさか集まってくるでしょうからソレは却下。

戦闘用のスキルメテリアルを持つてる人が近くに居ればこんなにコソコソしなくても良いんですけどね…流石にこの時間に森を渡る人は少ないで

すし。エルフの人も動物達を尊重して家に引つ込んで、役には立ちませんしこのままじゃ夜明けまでに狼たちのお腹の中に入ることは確実です。

ああ、美少女は薄幸なのですわ、なんてふざけて現実逃避してしまいたいぐらいに最悪な状態ですよ。

もう私が上に居る事に気付いていそうな狼も居ますしそろそろ逃げ出さないと。

正直なところ私一人でこんな時間まで外に居るのは自殺行為以外の何物でも無いんですよ。

故意にしろ事故にしろ、「俺たち、生きて帰れるのかなあ……」状態なのですよ。

あ、何処から遠吠えが？ え、下の一匹も返すように遠吠えを……あれ、なんだか森中が騒がしくなってきましたね……こう、なんていうか軽く地響きを感じられるくらいに！

一緒に枝も揺れに、揺れて、きて……！！ちょ、まってまって……つて……！！今落ちたら食べられちゃいますって！半ば地震のような揺れの中で生き残るために必死に枝を抱きしめて耐え忍びます。忍べなくとも凌いでみせます……あんなのに食べられたら痛いですから！！！！

しかし、どんなに力を入れていても止まらない地鳴りの前には徐々に身体が滑ってしまいますよ。

ううう……ついでに遠くから木々が薙ぎ倒されてるのが見えます、もつとでかいモンスターでしょうか。

ああ、こんなことなら遠吠えする前に毒草塗りこんだ矢でも打ち込んでしまえばよかった！

久しぶりに森のワールドへやってきた。

いや、来る気はなかったんだけど来ないといけない用事が出来ちゃったというか。現実での関係の性で手伝ってやらないといけない空気だったというか。…街のワールドの仲間に行って来いとひたすら頼み込まれたというか。それに合わせてリーダーもなにが「私達じゃ流石に夜の森は危ないんですから、男が行くものですよね？」だ！唯一隣にいるこいつだけは「僕の責任でもあるから」つつてつてきてくれたが。

「なんであのクソガキはこの忙しい時期に変な毒を貰うかねえ・・・だーりい、やってらんねー」

「まだ初心者なんだよ、ゲームだけじゃなく仮想現実にもね。危険物なんて分かる訳無いじゃないか」

「さっさと俺がパーティ組んでレベル上げてやればよかったじゃネエ力よ」

「…あの子が戦場に出るだけですぐに倒れてお荷物になるに一票。ゲーム内とは言え血に慣れるまでは時間の無駄だよ。毒を受けたのだって僕がモンスターを代わりに倒した時に気絶した所為だし」

「ほんつとに使えねえ・・・あの阿呆」

文句しか出ない。本来なら来るはずもなかった此処を訪れた理由、ある日急にねだって自分も遊ばせて欲しいと言い出した『妹』を思い出し、さらに怒りが募る。

「確かにレベルが上がればスキルの中にバッドステータス無効が入る事もあるけど…僕の見立てじゃあの子はそういう能力は持たないよ」

「やっぱアイツがもってるのはス力だよなあ」

「三つ全部空想固定化のマテリアルだからね。使い方次第で変わる原石みたいなものだよ」

「でこぴん一発で壊れる固定化なんか役に立つかツツーの」

「…其処は、訓練次第だよ」

「……」

「……」

沈黙が包む、いや動物の声はしてるけどよ。

「まあ、今は解毒薬が先か」

「そうだね、森だけあって夜行性のモンスターが騒がしいぐらいだし」

「確かに…いや、変に騒がしいか。NPCだけでこんなに騒がしくなるもんだっけ？去年一人で来た時だつてもっと静かだったぞ」

「ふうん…意外と他の冒険者が居るのかもしれないね、助けたら道案内してもらえるかも？」

「ずっと騒がしいままってことは…多分逃げ回ってるんだろうが、ただの迷子かもしれねーなあ」

「うん？逃げ回ってるなら…エルフ以外の人かな 時間の無駄だったら、放っておく？」

「…いや、虫の居所が悪いからついでにぶっ飛ばしておこう」
「素直に助けに行くって言わないの？」

「助けるんじゃないよ、道を知ってりゃ案内させるし知らなけりゃ金を貰うだけだ」

「ふう、相変わらず捻れてるね」
「ほっとけ！んなこたあ良いからさっさと特攻する準備しろ！！」

その叫びに反応したのか謀ったかのようにタイミングよく巨大な狼が目の前に現れる。ああ、斬り甲斐が有りそうなジャイアント系ののか。あ、遠吠えしやがった。

「おー、でっかいワンちゃん。いきなり仲間呼びやったよ、腹いせにいくつに切り分けてやるうか？」

「ん…数匹じゃ無い、周りにも何十体か居るね」

「あつはつは、この程度なら群れでも楽勝だろ？ドラゴンの群れでもお前一人で十分だし」

「……森への被害を考えなければ」

「考えんなよ？どうせすぐにポップするって、例え森のオブジェクトでも」

「……焦土に代わったら流石にしばらく修復しないと思うけど？」

「知ったこっちゃねー、ごちゃごちゃしてる森が悪い」

「もうすこし気を配ろうよ…？」

「向こうから襲い掛かってきたんだからしょうがない。これは正当防衛だぜ？」

ま、悪いって言うなら俺達が強くなりすぎたのが悪いと言えば悪かったかもな」

悪びれずに軽口を叩きながら自分のマテリアルを宿す腰の日本刀に手を伸ばし、相棒も呆れながら腰に吊ったリボルバーを構え、戦闘状態へと切り替えるキーワードを口にする。

「サムライソウル レベル5」

「ガンズナイト レベル4」

「マテリアル^{バースト}開放！！」

Side End

え？ああ、カメラ帰ってきました？未だにしがみついて頑張ってます

すよ！

徐々に巨大モンスター（仮）が近づいて来たためか、なんだか爆音と太刀の音声エフェクトが聞こえ始めました。……ミサイルポッドを背負ったライオンか何かなのでしょうか？初めて半年経ったとは言え流石に木々を薙ぎ倒すようなモンスターは聞いた事が無いですよ……一体何が迫ってきてるんでしょう。

そろそろ一度死んでしまうことを覚悟しておいた方が良くかもしれません、なむなむなむあみだぶつ……

コレだけ騒がしいのならせめて下の狼は逃げて行ってくれないでしようか？そしたらすぐにでも走って逃げられるのに。……？あら、なにか爆音に紛れて声が？

「ロック、フレイム、ショット」

「あー、あっちーなー。普通のパンチ」

「ロック、サンダー、ショット」

「あ、静電気がピリツときた。なぜか切れるキーク」

「ロック、スノウ、ショット」

「冬でも無いのに雪が舞う！でっこぴーん」

「ロック、トリプルバレッツ、ショット」

「それら三つまとめて一斉射！！んで、ざんけーにしょーす！」

「言っとくけど突っ込まないからね？カーブショット」

「えー、寂しいこと言っちなよな？猫騙しっ」

………えー、なんでしょう。人の声が聞こえるんですけど、幻聴ですよね？馬鹿が居る気がしますし。

「いちいち突っ込んでたらきりが無い。ロック、ホーミング……チャージ」

「はいはい、どうせ飽きもせずにはボケてるよーだ。あ、チョップ」

……キノセイデスヨね、Gウルフって一応強いんですけどね？

戦闘職でもパーティの人数より多い数の時は相手にしないで逃げるんですよ？

それをおそらく二人で森ごと巻き込んで遊びながら相手してきましたか？

あー、姿が見えてきましたね。棺桶を担いで魔女帽とマントつけた性別不祥なガンマンに、白黒ジャンバーを着た現代のバク…若者ッポイ双剣士[♂]。

剣は抜いてませんが何となく近寄るだけで「ズバー」とかやつてきそうなイメージが浮かびますね。さっきまでのやり取りを聞く限りでは！

「そろそろ数も減ってきたし一気に片付ける。間違えてロックしたら危ないから動かないでね」

「言われんでも分かってるっつーの、何年相棒やってると思ってんだ」

「…上にいる要救助者に言ったつもりなだけだね、相棒」

わーお、バレテラ。で、でも要救助ってことは…助けに来てくれたんですよ？

どうして助けを求めている事が分かったのかはともかく！

「はあ？上？」

「木の枝にしがみついているよ、耳が長いし…NPCに追いかけてるならハーフェルフかな」

「木の枝木の枝、よく暗くて分かるな」

「視線を感じたからね。よしチャージ完了、撃つよ？」

双剣士の人はともかく、ガンマンさんなら話が通じそうですね。

双剣士の人の視界に先に入ってたらと思うと怖いですよ…嬉々としてズタズタにされていても不思議じゃ無さそうなオーラ放ってますよ！チャージ後のせいかな今はガンマンさんもすごいオーラを放ってますけど！あ、腕を交差させて…

「チエイス・ショット！」

スキル名の発声と共に両手のリボルバーからおびただしい数の弾丸が森の中に消えていきます。あ、弾丸自体は早くて見えませんが弾丸が光っているので軌跡が残っているので森の中に消えることが確認できます。一定のリズムで時折光弾が出てませんが、連射中の休憩でしょうか？

「これで…標的残数激減…かな」

「たかがでけえだけの狼相手にえげつねえ弾丸撃つなよ…」

「明るくてよく見えるから頑張れば逃げ切れるさ、しつこく追い続けはするけどただの弾だしね」

「……詳細は分らんが何発か光らないの使っただろ」

「さ、それより救助者が先だよ」

「強引すぎる話題転換だな！！」

「男は細かいことを気にしちゃいけないんだよ？」

あ、会話してる間にも森のあちこちで爆音が…ああ、森が、私たちの森がボロボロに…襲われてたとはいえ、ちょっと可哀そうな気がします…色々と。

「その君―！生きてるか―い！！」

「死んでたら返事しろ―身ぐるみ剥いで金にするか―いでっ！」

「アンタはとりあえず相手が怖がるから色々話が終わるまで近寄らないで」

「ひでーよA・I・BO!」

「はいはい相棒相棒。あの子がこっちに呆れてるから後でね」

…助けられたはずなのに人買いの前に姿を見せるようですごく怖い
ですね。

まあ逃げたところで背中から撃たれるのがオチでしょうし、諦めて
出て行きましょうか。

優しい人ならいいですけど…あ、ちょうど真下にいますし受け止め
てもらえばいいですね。急に撃たれないためにも。

「え、えーと…今から飛び降りますから、受け止めてくださーい！
！」

「あー、んじゃ俺は無理だな。頼んだ相棒」

「僕もあんまり受け止める自信がないんだけど……？」

「受け止められる「かも」しれんだろ？俺がやったら確実に惨殺死
体になるって」

「あのー……大丈夫でしょうか？」

「失礼、僕が受け止めるからこっちに降りてきて!!」

「間違えても俺の方にくんなよー、死ぬぞー」

なんだかめっちゃくちゃ怖いんですけど…ここまできたら女は度胸で
すよね!せーので、ダイブ!!

風を切りながらつかの間の落下を肌で感じ、ガンマンさんの腕の中
に着地…あら、なんだか柔らかい腕してますね。あんなに軽々と
銃を扱ってましたからもつと筋肉でかたいものかと。

「やっぱり女の子だったね。」

「え、まじで？俺には黒い塊にしか見えなかったのになんでそこま

でわかる」

「僕のマテリアルの副次スキルだよ。暗視ゴーグル無しでも見渡せるのさ」

「女の……子？」

「うん？あれ、胸に詰め物とかして実は女装趣味があるだけのだった？」

「いえ…私じゃなくて」

まだるっこしいので腕の中からおろしてもらい、マントで隠れた胸元をギュツとつかんでみます。

あら、むにゅつと柔らかいです。

「ひっ！やあああー！！！！？」

「おーかわいいひめいー」

「あ、あんなに強いのに女の子ですかー！！！！？」

「おう、相棒は女だぜ？護身術として鍛えてたら強くなりすぎたんだとー」

「僕とかこんな無骨な棺桶担いで平然としてたりとか、男の子だと思っただけだよ！！？」

双剣士さんだけは一人楽しそうにけらけら笑ってますがガンマンさんは耳まで真っ赤に染めてその場にへたり込んでしまいました。

「ううう……だからって普通揉む？」

「いや手っ取り早くわかると思うぞ、ぺったんこでもなければ」

「はー…さっきの乱れ撃ちより驚きですよ…」

「まず言葉で確認しようよ……」

あ。ちょっと泣いてる姿がキュートです。強くて危険人物かと思いましたが、意外と普通の人なのでしょうか？驚いて少し選択を間違

えたかもしれませんが、ついぎゅっとしてしまいました。

「だからわかりやすい格好ときゃいいのによあ、出会いがしらで揉まれるとかそうそうねえだろ」

「指差すな、笑うな、むしろもう死ね!!」

「えーとー・・・色々失礼しました、です」

「ん？ああ、俺はかなり笑わせてもらったからもついいけどな」

膝叩きながら盛大に笑ってましたからね、この双剣士さん。あ、ガンマンさん睨まないで、つい好奇心に負けてしまったんです!! え、ちよつとその銃はさっきの…

「お礼とお詫びを兼ねて家に招待しますから機嫌を直してください
〜〜!」

「だから弱い人にその銃向けるなっ」

「離せ、まずはあの人の記憶を消さないと!!」

「ほんとにごめんなさいですよ〜〜!!」

双剣士さんがガンマンさんを羽交い絞めにしながら逃げる私を追ってきます。それでも私全力で逃げてるんですが…全然距離が離れてくれません。いえ、おうちに呼ぶので問題ないと言えはないのですけど…かなり怖いです、一人担いでこのスピードって一体…

こうして絶体絶命タイムは終りを告げました。ガンマンさんがまだ睨んできてますけど!

三回目 危険人物達その1、ですよ

深夜の森にふくろうの声――

太く息を吐くような調子で、時折休みがちに、夜行性の長老が鳴き続ける。

他に音らしい音もなく、穏やかな、静かな夜だった。

フクロウを除く全てが眠りについたかのような夜の森を、銀色の月が照らしている。

丸く丸く、挟れたクレーターの形まではっきりと見える、幻想的な光に見下ろされ――

絶賛迷子中です。

はい、絶体絶命タイムは終わっても迷子からは脱出していませんでしたーこんばんは、薬草師のイチコです。

隣にいる危険人物、もとい双剣士&ガンマンさんペアと行動を共にしてからNPCに全く襲われなくなったのですが…中々見慣れた道に出れません。やはり大分端の方まで追いかけたのでしょうか？
ただいま双剣士さんとはとかくガンマンさんのご機嫌がメルトダウ
ン中、流石に掴むのはやりすぎでしたか…ときおり、寒気がするほどキツイ視線が向けられてきます。

「あのー……そろそろ本当に許してくれませんか…？」

「（ぷいっ）」

完全に目をあわせようとしてもしてくれません…家に着いたら誠心誠意もてなして少しでも敵意を抑えてもらえるようにしましょう。私もまだ死にたくはないのですよ…！！

「しかしお嬢はなにをして迷子になったんだ？こんな敵だらけの森で」

「見たところロクに喧嘩も出来ないスキルしかないみたいだけど」

「あ、あはは…クリエイトの見本になるハーブとか、毒草とか探してたんですけど…」

さっきの狼さんに見つかっちゃいまして、そのまま。迷子に……」

コレだけはリアルラックの問題ですよ… 巣穴の位置はコロコロ変わるらしいですし、真正面からぶつかってしまうなんてよっぽどですよね…？

「ふふ、ふふふ… あははははははははははははははは」

「おい、どうした。お嬢ー？」

「…っ失礼しました。少しスイッチが」

「… 良い医者紹介しようか？黄色い救急車の方」

「いえいえいえ！」

そんなことよりも！そちらこそこんな夜中に何故このワールドへ？」

$$\begin{matrix} \top \\ h \\ \vdots \\ \bot \end{matrix}$$

「むう、僕らとしてもあんまり夜の間に強行したくはなかったんだけどね」

「……解毒剤を精製できるスキルが毒素を消せるような人が居るか、探しに来た。というか来させられたというか」

うわー…とても人様に見せられないようなひどい顔ですよ、双剣士さん？

ガンマンさんも苦笑いで宥めてますし……

「誰かが病気になったんですか？それとも危険な毒物でも使われま

した？」

「夕方より少し前に僕と一緒にこのワールドで狩りをして育成の手伝いしてただけ……」

「こいつの得物、銃器だろ？離れてサポートだけに徹しさせてたら……」

「「連れが返り血を見ていつの間にか気絶してて、さらに運悪く何かの毒が受けて寝込んでた」」

「はい？」

「つまり、何の毒か全く分かんねーってことだよ」

「……僕がサポートが途切れた時にすぐに戻ればこんな事態にはならなかったのに」

「俺らの本拠地——まあ街のワールドの一角なんだが、そこで寝てたらいきなり叩き起こされたからな」

「とつとと医者を呼びなさい！！つてよ」

「僕の監督責任だつて言つても聞いてくれなかったんだよ、あの人」「女子一人で夜道を歩かせるな、なんて……俺より弱えのにああいう説教のときだけは強いからなあ」

「……よくわかりませんがお疲れ様ですよ」

二人揃って心底疲れた顔をし出したのでとりあえず慰めておくのです……家であればリラックス効果の望めるハーブティーでも出せますが。ああ早くおうちに帰りたい！！なのですよ。

「……とにかくだ、俺たちはその毒を何とかする医者と薬草に詳しい学者を連れて行かなきゃならん」

「……それもあの人の眼鏡にかなう人間でなければアキラ……双剣士の妹に会わせもしない」

「………治るまで不眠不休で働かないとあいつのファンクラブの人間に殺される、かもしれないらしい」

「あの、その無茶を言う方は……いったいどんな人です？」

「弱いのに絶対無敵」

「なんと言いますか、難儀な人が相手ですね」

「まあ、今から会わせる人間に言うような評価じゃねえな」

「そうだね、とりあえず薬草のことを学んでる人はこれで捕獲——
いや発見したし」

「はい？」

「なんだか二人から悪人オーラが立ち上ってますよ？」

「それでもう逃がしやしねえぜ！みたいな嫌いな感じが……！」

「ハーブとか 毒 草 とか集めてるんだろ？」

「ゲーム内の時間とはいえ3日も続き続けるから僕らもこれ以上の徹夜は勘弁してほしいんだよ」

「……要は一回俺達の本拠地に連行させてもらっ、ってことだな」

「助けてあげたんだし……少しぐらい、返してもらってもいいよね？」

「はいいいい！！？」

「ちなみに断つても人攫いのごとく担いでいくから諦めな、お嬢」

「わ、私の都合は……」

「そんなもの……知らん……！」

「最悪です……！」

「ついて来てくれるんならさつきぎゅってした事も許してあげるよ
？」

「それって暗に、ついて来なきゃ一生許さないってことですよね？」

「当然でしょ？」

「ひい……！」

「あ、言つとくがそれでも断るとこのワールドの森が焼け野原に変わる
ことになるぞ、腹いせに」

「二人で5分もあれば滅ぼせるかな、多分」

「俺全力でいくから5分は長くね？」

「僕もたまには適当にばら撒いて撃つてみたいんだ、こっちの半分は残してよ」

「はいはい、オッケー。あと集落はどうする、場所ごとに半分ずつやるか？」

「一箇所ごとに交代でいいんじゃないかな」

「だ、ただただためですよー！ー！！？」

「ついて来てくれない場合はお嬢の事情を慮ることもない、俺達の精神の安定のためだからな」

「悲しいけど、僕たちの睡眠時間の代わりだよ。仕方がないさ」

「あーあ、ついてきてくれたらそんな事にならなくて済むのに」

「鬼ですか貴方達は！！」

「鬼ごとき格下と一緒にするな！！」

「外道！悪魔！PK魔！！」

「はっはっは、弱者が何かわめいておるわ！でも別にPKは楽しんでやってるわけじゃないぜ？」

「そうそう、ただ別にいてもいなくてもどっちでもいい経験値の入らない敵だなーってぐらい」

「後は実力も読めないのに挑んでくる自称ツワモノ苛めだよな？」

「神様！居るののだろうか今すぐこの二人に罰を……！」

「あ、この世界の神なら倒したからまたしばらくポップしてこないと思うぜ？」

「罰当たり者ー！！？」

「いや、この世界を楽しむ1PLとしてはここまで強くなったからには倒せるなら倒すだろ？」

「ちゃんとHPも設定されてたみたいだし元々倒されても問題なかったんじゃないかな」

「いやー、でもそんな相棒の胸をああも強く握るとは思わなかったぜ」

「せっかくあの変態のこと忘れようとしたのにまたこんな子にや

られるなんてね……」

「しっかり念入りに処刑してたじゃねえか、相棒」

「まあね、でも思い出すだけで腹は立つものだよ」

あ、二人で話してるうちにガンマンさんの殺意がどんどん研ぎ澄まされてきました。

私はいつの間にドラゴンの口の中に飛び込むより危険なフラグを立ててしまっていたのでしょうか!?

ガンマンさ、え、ちよつと！銃口をこっちに向けて顔をゴリゴリするのはやめて、あ、いえやめて下さい、お願いします！

顔を近づけて……何か眩k

「受けなかったら、このまま頬を撃ち抜く」

「……謹んでお誘いを受けさせていただきます」

「おーし言質取った！相棒もう解放してやりな」

「うん、聞き分けのいい子でよかったね……撃たなくて済んだ」

私には申し出を受ける以外の選択肢がありませんでした、そんな被害が出そうな選択肢が選べるわけないんですから。それにこの人、今の脅しじゃなくて本気でしたし。泣いて良いですか？良いですよ？

普通よく知らない他人を生きる価値なしって言わんばかりの絶対零度の瞳で見ますか？

その上で銃口押し付けて返答を迫りますか？

「ぐすつ……でも、どちらにせよ一度家に戻らないと……いろいろ道具が要るのですよ」

「マテリアルからそういうの勝手に出せないの？」

「ハープそのものは出せますけど、磨り潰したり煎じる為の道具は無理ですよ……」

「僕の場合は自動で弾丸の補充とか暗視ゴーグルがつくけど…」

「相棒、この子多分そんなにレベル上げてないから知らないんだろ」

「したくてもできないんですよ…できることなんて土いじりくらいですし」

「土いじりでも全部マテリアルに任せれば結構経験値溜まるはずだ、レベル上がってるの自覚してないのかもな」

「自覚も何も私のレベルは…低いですよ？」

「んー、一度家に行ってマテリアルについて講義してあげたほうが良いかもしれないね」

「とりあえず道具だけでももらってギルドに戻ろうぜ？あっちの方が人数もサンプルとして見せられる能力も多い。俺たちみたいな戦闘用じゃなく同じようなスキルを実演して見せたほうが理解も早いだろ」

「了解、まずはこの子の家を目指すところからで。君と同じスキルを持つてる人が集落にいたりする？」

「同じ…皆さんエルフですし。ハーブクリエイトができる人なら居たと思いますけど」

そのマテリアル貸して？といわれて大人しく両手にはめた手袋を手渡します。

あ、ガンマンさんが棺桶の中に手を入れて…あれはドラ・ンレーダ―？

とにかく、何か表示しそうなものを取り出しました。

「ちょっとサーチかけるから待ってて」

「外d、双剣士さん…なんですあれ？」

「外道と言いたいたら堂々と言え。あれなあ、流石に見たことないだろマテリアルを探すための道具だ」

「はあ…外ではそんなものも売られてるんですね、なんで最初

から使わなかったんですか？」

「あの機械、うちの仲間が作ったもので試作品だから欠点が多いんだよ。あれ使ってる間はマテリアルで戦えなくなるし」

「意外と不便なものですね……」

「さっきまでなら敵襲でお嬢がはぐれた時以外は使わないはずだったが、今はどうせ無理やりにもついてきてもらうお客様だし問題ないだろうと判断して見せてる訳だ」

「企業秘密ですか……。ちなみにもし、もしですよ？……うっかり外部に漏らしてしまったら？」

「そんな迷惑な奴は俺が指先からミリ単位でみじん切りにしてやる。いや、卸し金でも良いかもしれないな」

「どんな事があるうと絶対に外に漏らしません、サーー!!」

「聞き分けの良い子は本当に助かるなあ、ちよっとオハナシすればすぐに分かってくれる」

ドンドン逃げられないような状態に追い込まれてる気がします。狼に食べられるのとどっちがマシだったでしょうか……

「二人とも、反応有ったよ。ここから東に5分くらいの場所に同じマテリアルがいっぱい固まってるみたい」

「もうですか？ 便利なような不便なような……ですね、その機械」

「二人組みでならとっても便利なんだよ？」

「此処から……だったらエルフこった煮の街か」

「異種族共存とかエルフ系の村って言いなさい」

「こった煮……」

「色々居る所だからあってるだろ、さっさと行こうぜ？ そして早く俺に睡眠時間をよこせ」

「僕も早く眠りたいけど、ギルドでお目通しが終わってからだよ」

「すぐに用意しますけどその間だけは待ってもらいますからね」

「早く人間らしい睡眠がとりてえ」

「じゃあ急ごう。今からでも街のワールドに戻るまでは短縮できるから」

「それに私の家の集落に着けばすぐにでも世界観の移動は出来ますから」

「へえ、ゲートのある所なんだね？」

「エルフの町では一番大きい所のはずだからな。人を受け入れてる場所で、との制限はつくが」

せつかくNPCが減ってるんですし、もうすこしハーブ摘みをしておきたかった所ですけど。

彼らに逆らったら何をされるか分からないのですよ…残念。

「あとで報酬も考えとかないとなあ」

「報酬ですか？」

「そうだね、彼女の毒が治りさえすれば大抵のものは上げられると思うよ？」

「ふむ…」

「それ以外にもギルドに依頼として出してる仕事だしそれ以外の報酬もしっかりわたししておかないといかんだろ」

「僕らが探しに来てるのに依頼にも出してると…信用無いの？」

「無いんだろうなあ」

なにやら落ち込んでるようですが下手に口出して予先を変えられても困るので放っておくのですよ。

どんな正義も命在ってこそですし、報酬は魅力的ですが彼らの依頼主のお眼鏡に適わないのが一番安全ですよ…？でないと治せない時、腹いせにきつと拷問されてしまいますよ。

「早く行って早く開放して欲しいのですよ…いつ撃たれるか冷や冷やしますし」

思わずもれた眩きは、ガンマンさんに引きずられながら浮かんだ、
心の底からの本音でした。

四個目 いざゆかん冒険者ギルド、ですよ（前書き）

登場人物が増えてくる中、性的に危険人物とバイオレンスに凶悪な人が出てくるため 一応警告タグを二つ付けておきました。
あっさりとした描写で流す事も多いでしょうが念のため、です

ある毒草とその解毒用のハーブのサンプルだけは全部もって行きましょう。手持ちの中に効く物があれば良いですけど……

「一応準備できましたよー。病状を見るだけなら多分大丈夫ですよー！」

「おー、ようやく終わったかー！」

「ふわぁ……つく、さつきから眠気が来てしょうがないよ」

「私とその絶対無敵(?)な人に認められればすぐに眠れますから、もう少しだけ頑張って下さいね?」

「……そうしないと集落ごと滅ばされかねないから、とか考えて無いだろうな?」

「ぎくっ」

「わざとらしいほど分かりやすい反応だね」

「まあ、本当にそうできるからしょうがないよなあ。疑われるのもよ」

「ええそうですよ、疑いますよ!先程から隠そうともせずにヤツアタリの算段を立ててましたからね!」

「だから逃げなきゃ集落には手を出さないって」

「いいから行きましょう、早く場所を移さないと何の弾みで斬り出すか分かりませんからね!」

「……からかってたらお嬢が怒ったな?」

「コレがキレイやすい若者なんだよ、きつと」

「は・や・く!」

コレ以上ペースを持っていかれたら後で大変な目に合わされそうな気がしますから、本気で怒った振りでもして街の方に行ってしまうでしょう。向こうならどこに被害が出て私とは関わりが無いのですよ、ふふふ。それに哀しいですが私ではお二人を絶対に止められないんですよ。

「相棒、さくつとゲート開けてくれや。俺がやるとコレ壊れるからさ」

「…どうやって行き先を入力して飛び込むだけのプログラムを壊せるんですか」

「僕もあんまり入力して指定するのは好きじゃないな、ちよつと力を入れすぎたらすぐ壊れるから」

「…小型の猪型モンスターが誤って突進してきても傷一つ付かないぐらいには頑丈なはずですよね？」

「さつき見せたとおり素手でも十分に狼を狩れるもので」

「力はないけどスキルの性質で周りのエネルギーも吸ってるもので」

「そうですねー、お二人ともデタラメですからねー」

「ゲートが動く為の気力が精神力が分からないけど、ソレも根こそぎ持っていくこの身体が憎いよー」

「何でも斬れてしまうこの身体が憎いー　　というかホントはぶつちやけメンドイ」

「せめて声色だけでも憎そうにしてからいいましようねー？後ぶつちやけないで下さい」

相手はすぐに脅しをかけてくる危険人物ですが、だんだん対応するのが面倒になってきましたので反応もそこそこにスルースキルを發動して行こうと思います。

西部の酒場にありそうな門だけが鎮座しているこの場所こそが別のワールドに繋がるゲートになっている…らしいのですが私は出たことが無いので詳しくは分かりません。ただ知り合いのおじさんはいつも此処から街に帰っているの、ちゃんと動いているのでしょう。きつと。

「行き先指定、街のワールド…2つありますけどくシェアリング・

シティ>とやらで良いんですか？」

「そうだ、ソッチの街の方。間違えて<ラウ・ハーツ>とか飛ぶなよ？」

「ワールドの説明を読む限りはお二人は<ラウ・ハーツ>出身に見えますけどね」

<シェアリング・シティ：全てのワールドの中で最も他のワールドと交流の多い商業都市。また冒険者ギルド、戦士ギルド、傭兵ギルド等多種に渡るギルドが立ち並ぶため、仕事の斡旋も行われている>

<ラウ・ハーツ：荒くれ者の最終的に流れ着く先。基本的に他のワールドから受け入れ拒否を受けたプレイヤーが住み着く為、スリや強盗等軽いものから裏のやり取り、暴行やPKなどの悪事が横行する。

*このワールドに入る方は特にPL情報の取り扱いにご注意下さい！>

「荒事は好きだけど、流石にそう言われるのは心外だよ？」

「ああ、あそこの連中には美学がねえ」

「森を壊しながら突き進むお二方が言っても説得力が皆無なのでですよー？」

「……そんな事はない方がいいけれど、アソコの連中に会えば言ってる意味が分かる」

「またハモって、どのくらい危険なところなんですか？」

「後で、マテリアルの講義と一緒に他のワールドの幾つかもひっそるめて教えてあげるよ」

「正直今教えてると思いきや怒りがこみ上げてきそうだな、起床後に教えてやる」

コレまでにない程真剣な顔で話すお二人……私としてはこれ以上の危

険人物は居ないと思いますが、言わないでおきましょう。さ、ゲートを繋いでOKです、そのままよいしょと門をくぐってしまいいましよう。

「では、お先に向こうに渡っておきますね」

「あ、乗り物は何にしたの？」

乗り物・・・？ とにかく速いこと以外は特に決めてませんが、何か問題でもあるのでしょうか――
「つつひゃわああー！！！！」

「あっちゃあ、よりによってソレなんだ」

「おー、何を思っ世界間移動最速を誇る『バブル超特急』にしたんだろうなあ」

「…彼女、ワールド移動は初めてだったから。速いことだけ見てたらきつとアレを選ぶよ」

「知らずに選ぶとはまた…心の準備無しであの洗礼を受けて無事かねえ。俺だっ覚悟完了しても乗りたくねえよ、これ」

「早く追いかけよう、あの叫び方からして多分向こうで倒れるだろうし」

「……懐かしいなあ、着地失敗で地面を大きく抉った初のワールド移動が」

「また教えないといけない事が判明したね」

「……………あのお嬢、こんな調子でこの先生きのこれるか？」

「森のワールドの中なら大丈夫だよ…コレまでも大丈夫だったみたいだし」

眩きながら二人もゲートを押し開きながらイチコと同じように地面から染み出したシャボン玉に飲み込まれ急スピードで射出された。
・バブル超特急 その名のとおり地面から染み出るシャボンが移動

者を飲み込んだ後、猛スピードでワールド外に撃ち出して世界を移動する。最速ではあると同時に最も危険であるため、主に緊急時や戦慣れした戦士などが使用する上級者用。

風は感じませんでした。物が物凄いい勢いで引つ張られていく感じがジエツトコースターそっくりでしたよ。

不規則な軌道で物凄いスピード、コレで酔うなと言うのは酷ですよ……皆さん、いつもこんなものを使って移動しているのでしょうか……ちよつと信じられません。

まあ何はともあれ、イチコは無事に到着いたしましたよ……今、ちよつと出口に居た子供に受け止められたからですが。

「すみません……ご迷惑を」

「怪我はない？」

「こちらは全く、全然、何ともないのです!!」

「今回死ななかったのは偶然、運が良かったから。バブルでの移動は緊急時以外の使用は勧めないよ」

「うう、初めての移動でしたから……ちよつとした手違いなのですよ」

「慣れないうちは全部誰かと同伴した方が良いでしょう……オレは急ぐから、もう行くけど」

「あ、はい。本当にありがとうございました!!」

「今は行くところあるからダメだけど……どうしても同伴者が見つからない時はギルドで『運び屋』って言えば、オレに伝わるから」

「運び屋、ですか？」

「うん。それじゃね、おねーちゃん! 『行き先指定くらウ・ハーツ』、バブル超特急」で

「さよ～なら～ですよ」

言うだけ言っただけそのままゲートに飛び込んで飛んでいきましたね。なんだか、慌ただしいですがいい子でした。思いつきりぶつかったのに全く怒らないなんて、心が広いのでしょうか。

今……そんな子の行き先が危険な所だった気がしますが、気のせいですよ？

「泡をぶった切って華麗に着地！さあ、点数は？」

「よつと、ただいまの点数は審査員が居ないので無効とさせて頂きます」

あ、お二人も追いついてきましたか。あんな泡に乗ってペースを崩さないのは流石と言いますか……すごくマイペースですね。

「お二人とも、余裕たっぷりですね。コレが慣れと言うものですか……」

「おゝ無事だったか。荒っぽい乗り物選んだから心配したぜ、お嬢」

「僕はそこまで余裕ないって、まだ少し飛んでる感じがするし。正直徹夜中にこれは厳しい」

「……私も受け止めてくれた人がいたので無事だったんですよ……一人だとどうなっていたことやら、です」

「あんまり辛いならまとめて担いでいってやろうか？」

「遠慮するよ、うつかり斬られちゃたまらないし」

「……同じく遠慮しておきますですよ」

「そうか？まあどっちでも良いが」

んじゃ、きりきり歩けよ？とそのまま移動をはじめ双剣士さん。この時間帯はさすがにガラガラみたいですが、通りに広がるショップやレストランに挟まれて時折戦士ギルドや教団のようなものの建物が見られます。……そう言えばお二人が何のギルドか聞いていませ

んでしたね。

「お二人の所属ギルドは、なんのギルドなんです？」

「おろ？言い忘れてたっけ？」

「弱いのに絶対無敵な人とか妹さんがボタンキューのことぐらいしか聞いてませんね」

「あゝゝゝそうだったか、悪い悪い。俺達は冒険者ギルド所属のプレイヤーだ」

「冒険者ですか…？」

「そう、冒険者！レベルアップを至上目的とし世界最強を目指したり、宝探しに燃えてダンジョンを踏破しつづけたり、人々の憂いや悩みを解決したり。ただ戦いつづける戦士でも金のために戦争に参加する傭兵でもない、アウトローな奴らばかりあつまるこの世界最大のギルドだ！」

「まあ戦士ギルドからの依頼も受け持つてるけれどね」

「要はやりたいことをやる何でも屋ですか」

「そういうこと」

「ほら、見えてきたぜ？その何でも屋がよ」

言いながら見つめる先には……これは、館でしょうか？7階建ての洋館がそびえたっています。

って言うか大きいですね、その見た目に反さず中はとても騒がしいみたいです。

あれ、双剣士さんが何やらドアに向けて一瞥をむく……いきなり走り出しました！？

そのまま勢いを殺さず——文字通りドアを粉碎してダイナミック帰宅。馬鹿ですか、そうですか。

「おら帰ったぞルシアーーーー！」

ついに絶対無敵さん（仮）との対面ですか…申し訳ないのですがガンマンさんの言う常識人はあまり信用ができないのですよ。階段を上がってすぐの大部屋の前で気を落着けてから会うことにしましょう。「連れてきたぞ、ルシアー！」双剣士さんが叫びながらヤクザキック・アゲイン。ドアを蹴るなど言わなければ分からないのでしょうか？あ、中から誰か出てきましたね。鮮やかに光を受けて七色に煌く銀髪が見事なシスター…ですかね。訪問者とは対照的にとても静かで落ち着いた雰囲気をもし出してますよ。ゆっくりと医務室と思わしき部屋のドアを閉めてからそのまま私たちに向き直りました。

「ここは…」

「ほれ、毒についてわかりそうなハーフェルフのお嬢連れてきたぜ…って、どうした？」

「病人の寝る所だといつも言ってるでしょう、この脳筋男！」

「ぐほあっ…！」

「いつもいつてますよね？ここがゲーム内でもルールとマナーは現実と同じだと、どれほど強くとも私があなたを正すと」

「いでででで…！ヒールで腕を踏むな…！？」

「言ってわからない野獣には体に叩き込んであげるしかありませんよね？人であるならば言った時点でちゃんと、この位は理解できますからね」

「擦るな擦るな…！」

「あ、あの…私は誰を診ればいいのでしょうか？」

私が話し掛けると絶対無敵さん（？）は双剣士さんへのお仕置きもほどほどにシスター服を正しながら近寄ってきます。あの森を破壊してくるコンビの一人をあっさりと床に沈めて踏みつけるとは…この人、本当に弱いんでしょうか？

「今回は外部の方もいらつしやったようですしこの程度で開放してあげましょう、次はありませんよ」

「ちつと癖で蹴っただけじゃねえか…！いつてえ…」

「本日は夜分の遅くにお呼び出したことを謝罪いたします。私はルシア・ヴァルキリー。ギルド副長を務らせて頂いております、しがない聖職者であり今回の依頼の依頼者となります」

「ご丁寧にもです…私はイチコと申します、薬・毒草についての知識がお役に立てるかと思いましたが一度診察に伺った次第なのです」

「そうですね。ではイチコ、早速ですがこちらへお願いします」

ニツコリ笑って医務室の中に戻るルシアさん。あ、すっかりもう一度双剣士さんを踏んづけていきましたね…この人、実はDSだったりするのでしょうか？逆鱗に触れる前について行った方が良さそうですが、さっきまで散々言っていたお目通りは良いのですか？あとガンマンさんはいつの間にか居なくなってますが、一体何処に…

「あの、面接してから…との話でしたけど…そのまま見ても良いので？」

「その点をご心配なく、彼女の熱が酷くて余り眠れていない様なので今はとにかく早く楽にしてあげたいんですよ。それに…ソレだけ綺麗な色なら問題はありません」

「色、ですか？確かにピタピタスーツはかなり明るい緑ですけど」

「ふふ、お気に為さらず」

「？」

「この子の診察を終えたら呼んでくださいね、私は少し常識知らずにお仕置きをしてきますので」

「ほ、程ほどにですよ？」

「ええ、殺しはしません。静かに*りますし、此処は防音されてま

すから表で騒いだとしても大丈夫ですよ」

ボタンと音を立ててドアが閉まりました。外の様子も少し心配ですが今はこちらの子を優先ですね。ベットの上で消耗しきってぐったりしているようですし、さて何が原因でしょうね？さくつと布団を退けて全身を見渡してみますが、特に大きな傷のようなものは見当たらないので大型の動物は除外ですね。

しかし妹だけあって双剣士さんと同じ茶髪で顔の形も似てますね。白黒ジャンバーと帯剣も、そろえてますし…ブラコン？

「…見てるだけなら手伝ってもらっても良いですか？」

「……」

「この部屋に一緒に看病に来ていた方ですね。姿は見えませんが視線を感じます」

しばしの沈黙のあと、ベットの中からじわつと赤い液体が染み出して人の形を取り始めました。

中から液体が溢れるごとに徐々に赤い髪、紅い目をした裸の女性がベットの上面に姿を現します。

「いつから気付かれてたのかなあ？」

「ふう、ホントに居ましたか」

「あれ…気付いてたんじゃないの？」

「残念ながら私にそんなスキルは無いのですよ。下でルシアさんはライミーさんと看病に行っていると言われましたからね」

「あーただのカマかけだったのかな？」

「ええ、誰も居ないのなら恥ずかしく無いですし。まあ、流石に裸族が居ると思いますけど」

「……あっさり騙されちゃった？」

「はい」

私もまだまだだねえ、とベットの下のいじけていますが手伝ってほしいのはホントなんですよ？

「全身くまなくみたいので、服を脱がすのを手伝ってください」

「気を失った少女の服を脱がせて丹念に撫で回すつもりかい？」

「あくまで噛み傷が無いかの確認ですからねー。ベットの下からそういうこと言ってるに変態以外の何でもないですよ？」

「変態でも気持ちちがよければ私はかまわない」

「冗談ですよ？」

「常日頃からこの世で真に大事なものは気持ちが良いことだと断言しているね」

「処置不可能、と。やっぱり私一人でやりますから人が入らないように見張っておいてください」

キツパリと言って真つ赤に透き通った彼女の身体をドアまで押しかけていきます。意識の無い状態で怪我されたら私の命が危ういのですよ。主に双剣士さんとルシアさんからの叱責で。

…しかし、どこかで見たことあるような光沢をした肌ですね？こう、弱いけれど厄介な……スライムっぽい？

「いやだな、流石に治療中は邪魔なんてしないよ」

「さっきの言動からは全く信用できないのですよ？」

「軽いジョークだってば」

「冗談をつい実行してしまうんですね、ワカリマス」

「しょうがないなあ、服を脱がしておくだけで我慢するかな」

「はい？脱がせて？」

「じゃあ大体診察が済んだら呼んでね？」

「あ、ちよつと！」

呼び止めようとした瞬間にドアの中にしみこんで部屋の外に出て行ってしまいました。

…後ろを振り向けばいつの間に行っていたのやら、本当に全裸にされた妹さんの姿が。ライミーさん、油断も隙も無い人ですよ。実は今もこの部屋の中に居るのではないのでしょうか…
とにかく、診察再開です。

五個目 診察のお時間、ですよ

ベットのの上に、少女が二人。

一人は身体のラインが浮き出るほどにピッタリとした薄布だけを纏い、もう一人は何も身につけておらずその裸体を惜し気もなく月光の元にさらけ出していた。意識が無いのか、抵抗する気が無いのか。片割れの少女の為すがままとなっている。

薄布の少女は彼女の白い裸体の隅々まで指を這わせ、その傷一つ無い滑らかな肌に羨望を覚えつつも頬を撫で、首筋をなぞって未成熟な胸元を通り、一度背中を経由して腰。ヘソから下腹部、片足を掴んで根元から爪先まで顔を寄せ――

「蛭みたいな小動物でも、斬り傷から毒液が入った訳でもなさそうですね。体温が高いので動物の毒かと思いましたが」

何となく雰囲気がかわしいですがただの診察中なんですよ？ 皆さんこんばんは、薬草師のイチコです。服自体はライミーさんが脱がせていきましたので身体に傷が無いか血眼になって見つめたりペタペタ触ったり、なでまわしたりしてましたけど。ただの治療行為ですからね？

「……辱められた」

「ドーベルマンに喉笛噛まれたと思って我慢してくださいね」

「おのれ、この恨み晴らさずでおくべきか……っ！」

「おくべきです。後は森の毒草なのかを調べますから、せめて終わるまでは静かにしててくださいね」

あ、途中で妹さんも眠りから覚めました。元々浅い眠りを繰り返していたそうですし当然と言えば当然ですが。脅されても血を見て倒れるような子なら怖くは無いのですよ。

「まあ、調べるとは言えどの辺りで倒れたのか。近くにどんな植物が有ったか等を効くだけですけどね。さあ、キリキリ吐きなさいです！」

「そう言われてもな、私は引きずり回されてただけだから、その…よく場所は分かん」

「この役立たず…じゃあ出てきたモンスターの姿でいいですから、さあ！」

「ん…あれは確か」

S i d e ルシア

—— 仕置き完了。

廊下の隅で横たわって気絶しているシド（双剣士）を空き部屋に放り込み終え、溜息を一つ。

さて、では私も少し仕事をいたしましょうか。スミカのために少し時間を使いすぎましたし、書類も溜まってるでしょうね。ギルドへの依頼の選別や斡旋、各種備品の注文やらギルド内の金銭の流れをチェックしたり、色々ありますから人任せにできないのが辛い所です。このゲーム、一部分リアリティを追及し過ぎて逆に不便なんですよね。

防具を直すにもいちいち防具屋に預けてハイオシマイとはいかず、材料の調達と修理期間が掛かるんです…ふう、せめてもう少し書類の山を築く原因が静かになってくれればよいのですが。

「後で<ラウ・ハーツ>にお使いに行ってもらいますか。エグゼスも先に調達に行つてますし、合流すれば簡単でしょう。何より、あそこなら暴れられても問題は有りませんし」

「人の迷惑ならいいんだとか、場所がお使いで頼むレベルじゃないと思うとか言いたい事は色々あるけど。とりあえずただいま、ルシア」

「おや、顔を見せないと思えば…ここに居たのですか」

階段の影から現れたメイズ（ガンマン）に一瞥をくれてそのまま一階の執務室へ歩きながら話を聞くことにします、時間も無いですから。何も言わずとも報告のために彼女は後ろから付き従ってきてくれるイイコでからね、主人の意を汲む従者は好きですよ。書類生産機の馬鹿と違つて。これで気が荒くなければシドの見張り役から私の雑務の手伝いをしてもらうんですが、如何せん少し戦闘向きである為か喧嘩っぱやい所だけが玉に瑕です。

「本当は僕も一緒に報告に行くべきだと思つただけどさ…ライミィ、居たみたいだから」

「そう言えば貴方は彼女が苦手でしたね。いつも逃げ回っているようですが無故かしら？」

「……………」

「言い難いようであれば無理に追求はしませんが…仲間内で何か諍いがあるのなら出来る限り解消しておきたいので素直に教えなさいな。秘密は守りますよ」

急に黙り込んで足を止めたため、喧嘩でもしているのかしらと振り返つて顔を見やる。

あら真つ青ですね？よっぽど言いづらいことなのでしょうか。

しばし待ち、喋れないことなのかともう一度歩きはじめた所、ポツリと言が。

「……僕を見ると必ず揉んでいくからさ」

「分かりました。何を、とは聞かずとも分かりますから其処まで」
「……アイツ、軟体で銃弾も効かない上に変に手馴れてて気持ち悪いし、本気で暴れるわけにもいかなからライミーがいそうな所に寄らない様にしてたんだ」

「素直に聞くとは思えませんが、あとで一応注意しておきましょう。これからは余り一人にならないようにしてくださいね」

「……お願いしとくね」

「大抵の所には侵入できますからね、あの身体は。情報収集させるときは有効なのですが」

「ただの覗き魔と言ったほうが正しい気がするよ、アレ」

「……思った以上にくだらないことですが仕事一つ追加です。可愛い部下のためなら少しくらいの無茶は聞いてやるべきだとは思うのですが、ライミーもそこそこ使える子なんですよ。まあ、誰もいないところ以外では禁止する。とでも言っておきましょう。」

「あ、ルシア……もうひとつ言っとかないといけない事が」

「あら他にも誰かがセクハラしてきていますか？貴方はからかい甲斐が有りそうですからね」

「……君が僕にどういう評価を下しているかは横においておくとして、またドアが壊れたよ」

「……壊した本人に修理させなさい」

「……いつも通り、シドが触って」

「アイツ、一度海のワールドに沈めてあげましょうか？」

前方の件の破壊されたドアを見ると、先程のお仕置きではまだまだ足りなかったと痛感しますね。

お使いだけではなくほかにも何か押し付けておきましょう。

Side End

ええっと、カメラ戻ってきました？はい……散々薬草のサンプルを見せて、ようやく原因が判明しました。今ライミーさんに双剣士さんとルシアさんに伝えに行ってもらいましたが病気でも毒物でも無く……ただの薬草の過剰摂取です。雪山に挑む時に使うような身体がぽかぽかするホツカイ口的な薬草の。

群生してる所は普通、中々侵入できないテリトリーなのですが……まあガンマンさんの強さなら侵入も出来そうですね。その辺りにポツプツしてくる子化けの巨人は、子供の姿で油断させて近づいた瞬間丸呑みにしてくる割と凶悪なモンスターですがガンマンさん見た目子供でも全く容赦無さそうですし。あら……なんだか何処からともなく殺気を感じるような？

えー、さて、寝込んでいる原因は分かりましたが一つ問題があります。

治し方を知らないわけでは無いのですが薬の材料に問題があるといえますか。

材料自体は手に入らない物でも無いのですが、少しばかりお値段が掛かるんですよ……このまま雪山に放って自然に効果が切れるまで待つてもいいですが、流石に危険ですし。

「おおーいつてえ。いつも通りとは言え、ほんとに容赦ねえわ」

「あ、原因が分かり、まし、た……よ？」

「ようやくわかったか、なんか結構掛かった気がするが」

「毒物から探してましたから中々見つからなかっただけですー。……それより何でそんなにボロボロなんですか」

「いや、お仕置きに抵抗したら更にプラスされてこうなった」

「…ルシアさんがやったんですか？」

「ソイツ以外に俺をここまでボコボコに出来る人間はうちにはいねえよ」

ルシアさん……想像以上に強いのかもかもしれませんね、絶対に怒らせないようにしましょう。

「ソレはまあいつもの事だからほっとけ、結局毒じゃなかったのか？」

「ただの薬草の過剰摂取でしたよ。身体を温める効果のある奴ですね」

「薬草にしちゃあ効果が凶悪すぎねえか……？ずっと寝込んでるみたいだが」

「元々寒いところで身体が冷えないように肌に一滴垂らして塗りこむのが正しい使い方ですから」

コレに限りませんが使わない人には分かり辛いんですよ、薬草の効果って。と言うわけで実際に使ってあげましょう。植物に限って言えば私の知識にあるものであればすぐに作れますし。

「【ハーブクリエイト：火草】ですよー」

「ひぐさ？その唐辛子もどきか？」

「薬草の名前ですよ、ちよつと実演して見せた方が速いかと」

両手を合わせて開くと手のひらに作成された件の薬草が乗っています。双剣士さんが言ったとおり見た目は青い唐辛子なんですよ、コレ。

「本来は蔦を少し切って絞り取った果汁、と言うより液ですね。ソ

レを塗りこむですよ」

「……で、実際にそんなものを出してどうする気だ？」

「妹さんの辛さが全く伝わってなさそうですから、実際に使ってあげるのです」

「ふむ？まあ確かにソレがそんなにヤバイ代物には見えんが」

「でしようね、私も知らなければ雑に扱ってしまうでしょうし……はい、まずは薫から一滴ですね」

「……よくわからんが、何となく暖かい……のか？」

「双剣士さんの体質がおかしくなければ直にカイロぐらいまでは暖まりますですよ」

「あ、暖かい暖かい。でも此処の気温だとむしろ不快だな、これ」

「覚えておいて下さいね、薫でこれですから」

「…薫『で』？」

「ええ、『で』ですよ」

はい、ではすぐに洗い落とせるように水をバケツに入れて…厚手の手袋を二重三重にして最後にゴム手袋を、コレで準備OKです。

「実を潰して浴びるとこうなります」

有言実行ですから、恨まないでほしいのですが。双剣士さんの腕に火草の絞りたて果汁をポタリと垂らすと右腕が炎に包まれました。

「何じゃこりやああっ！！！？」

「実の部分は温度上昇が著しいですよ、ぶっちゃけ可燃物に振りまけば火がつくぐらいには凶悪です」

握り潰した残骸ごと右腕をバケツの中につけながら双剣士さんの慌てっぷりを見て楽し「斬ッ！！」あ、炎だけ斬り飛ばし（？）ました。非実体まで切れるんですね、割と便利な戦闘スキルみたいです。

「イチコオ！なんだありゃあ！！」

「実は主に攻撃用ですね、今言ったとおりとても熱くなりますから」
「薬草がこんな攻撃力を持つか普通！！」

「耳が痛いので余り近くで叫ばないで欲しいのですよ」

顔をぐつと押して一旦離れます、殴られて惨殺死体とかは御免こうむりたいのです。

「これほど熱くなるので雪山ではちょうどいい感じに身体を暖めてくれるんですよ？」

「……右腕が火葬寸前だったよな、オレ」

「果汁の掛かった表面はこんがりですが中は無事です、きつと。これで危険性が理解していただきましたか？」

「……良くこんなものをくらって生きてるな、スミカ」

「倒れて潰したのなら効果の弱い痛んだ実だと思いますよ？それなら効果が長いのも不良品を使ったから、で説明がつかますし」

「ふむ、病気かとも思ってたが医者を探してたがそっちだと意味なかったか」

「ええつと、一応熱さましても大量に飲ませれば元気になると思います」
「……今度は副作用で死にますね」

「……ちなみに治療法は？」

「？これから三日三晩水風呂に漬け込む」

「ルシアから俺が処刑される、次」

「？雪山に一日放置して効果がなくなるまで待つ」

「今外のワールドに移動させようものならやっぱり処刑される、次」
「？と……ってもお高いアイテムで熱を逃がす」

「……値段による、いくらだ」

「そうですね、ざっとこのくらいでしょうか」

「何処からそろばんを……あ、ダメだ。俺の持ち金じゃ桁が5個ぐら

い足りん。ギルドに溜めてる分を出せば十分足りるが大抵修繕費に回るしなあ」

「でしようね。だから勧めにくいのですが、一発ですよ?」

「ううむ、毒消しとかじゃダメなのか?」

「今の熱は厳密に言えば毒では無いので万能な毒消しではお話になりませんよ」

「?どつかからそのアイテムを盗んでくる」

「そんな簡単に盗めたら苦労はしないですよ…希少品ですからあるかどうか分かりませんし」

「ちなみに何てアイテムだ?そんな馬鹿みたいな金額は聞いたことねえが」

「…フェンリル印の【氷石】ですよ、これは火草の真反対の性質のアイテムです」

「…フェンリル殺しまくればドロップしねえ?」

「…友好の証に立ち入り禁止エリアからフェンリルのNPCがとってきてくれるですよ」

「……つまり?」

「一匹でも殺したらゲット不可能です」

あ、急に頭を抱え込んでうずくまりました。この様子だと、多分レベルアップか何かのために狩ってますね…この人。あ、ノックの音が…誰でしょう?

「遅れてしまいました。原因が分かったそうですが治療の当てはありますか?」

「あ、ルシアさん。すこしアイテムが揃いそうに無いのですが…」

「そうだ、お前なら大丈夫だ!不殺通してきたんだろ?」

「…いきなり何の話です?」

「実はカクカクシカジカ…なのですよ」

「はい、カクカクウマウマ…確かにそれなら頂いた事は有りますが、取りに行くと確か2〜3日ほどNPCが戻ってこなかったはずです」

「待て、その時に貰った手持ちは？」

「貴方が壊した物の弁償代を工面する為に売り払いましたよ。中々いい値段でしたから」

あ、今度は崩れ落ちました。双剣士さんは無駄にリアクションが派手ですねえ？

「…つまり、八方塞りか」

「珍しいものだったんですね、アレは」

「そうなのですよ…普通に過ごすだけならしばらく遊んで暮らせる額なのです」

「ですが珍しいのならば、逆に手が残っていますよ？少し危険ですが」

「……暴れていいなら？」

「？番選ぶのは禁止ですよ！？」

「？番、とは？」

「ああ、どつかから盗んでくるってさつき選択肢が」

「ならまさに？番でいい感じですね。思う存分に暴れてきてもいいですよ」

「はいいい！？」

「少しマテリアルとってくるわ、多分荒事になる」

「やる気満々でいかないで下さいい！！？」

「イチコ、先程から叫んでばかりですがアイテムの形はわかりますか？」

「へ、資料としてですが一応…」

「シド、彼女を連れて偽物を掴んでこないようにしなさい。刃向う者には容赦などありません」

な、私も行くこと決定ですか！？ナチュラルに行って当然みたいな流れになってません！？

「おう！喧嘩売られたらぶっ飛ばして良いよな？」

「スミカのためです、ソレにあそこにある場合正規ルートの品では無いでしょうからね」

「ついでに裏も叩き潰してこいつてか？」

「なにも叩き潰さなくて良いですよ、少しお勉強させて上げなさい」

ポカーンとしてる間にお二人が悪巧みをしてるようなイイ笑顔を浮かべているのですが…何故でしょう、冷や汗が止まりません。とても危ない目に合わされるような気がします。

「お嬢…？」

「は、はひー！」

「さっきは会わない方が良いと言ったばかりで舌の根も渴かん内に撤回する事になるが」

「あの、まさか盗みに行く場所とは…」

やっぱり凄く嫌な予感しかしません。いえ、もう大体わかってはいるのですがさっき言われたことを考えると滅茶苦茶信じたくないといいましょうか。ああ、目の前の二人が凄くイイ顔してますよ。人を地獄に突き落とす鬼みたいなの——

「「勿論、くらウ・ハーツへ」」

六個目・・・お使い、ですよ（前書き）

忙しくてマイペース投稿がかなり崩れてしまいました…

六個目・・・お使い、ですよ

「盗品の運搬は向こうにいるはずのエグゼスに任せます」

「了解！・・・くう、盗品を盗むって発想もゲームだからだよなあ！」

「本来ならゲームといえど盗みが横行してる事は間違ってますが蔓延っているのならソレはソレ、利用させていただきましょう」

「オラ、すつごくわくわくしてきたぞ！」

「どこの戦闘民族ですか・・・あくまで反撃だけです、認めるのは？」

「大丈夫大丈夫！イチコが隣にいりゃ絶好の力モだと思われるって」

「・・・其処は否定しませんが、私がエグゼスと合流するまで派手に暴れまわらないようにしてください」

「派手に暴れても逃げ切れるって楽勝楽勝！」

「・・・エグゼスはくらウ・ハーツの出身でしょう？刺激するのではないですか」

「否、生まれはあそこでも思い入れが無い、そして恨みの方が深い、きつと俺に合わせて暴れる！！」

「一人でも私では止めようがないんですから自重しなさい。・・・しかし里帰りのつもりでエグゼスに気軽に頼んでいましたが、コレからは見直す必要が有りそうですね」

皆さんこんにちは、ただいま絶体絶命なイチコです・・・ノリノリで危険（と自分で言ってた）な場所に連れて行くこうとしている鬼がいます。・・・何気にルシアさんも用意し始めてる気がします。・・・あの、ルシアさんが行くのなら帰っちゃダメですか？

「ところでシド、アイテムだけ取捨選択して斬らずにいることは出来ますか？」

「あー、ちつと厳しいな。家とか建物も大きく分けるとアイテムに

入ってっからよ」

「取捨選択自体は可能ですね？それならば逆に人だけ切れば十分です。…しかし家を斬るとは、自分も生き埋めになるつもりですか」

「埋まっても完全に斬り潰せば何とかなるからな！」

「自分だけは、ですね。よく分かるですよ」

「お嬢、言わずとも分かることは言うもんじゃないぜ！」

「すぐ…先行き不安です。私はこの先生きのこれるのでしょうか？」

* * *

「今度の移動は船なんですね？」

そんなこんなで一悶着終えて移動用のゲートを潜り抜け、ただいま空とぶ船に揺られてます。

船と言っても小池で乗るような数人用の小さなボートですけど。

さつきはよく見ることが出来ませんでした。今度は流れに乗るようにすすいと船が進んでいくので周りの景色を見る余裕もあります。

「ええ、さすがにバブル特急には負けますが快適さと速さの兼ね合いを考えるとこれが一番ですからね」

「……二度と泡はゴメンなのですよ」

「世界間を渡り慣れてる人間ならもう一つ良い物があるが、アレは自分で操縦するもんだからなあ」

「私はアレ、嫌いですけどね。髪も服も乱れてしまいますから」

「アレ…ですか？」

「ああ、アレ」

「イチコ、貴方はマテリアルの開放できるレベルが2以上有りますか？」

「え、はい？一応全て4か2でそれ以上いつてますけど…何か関係でも」

「関係大有りだ。よし、知らないなら帰りに見せてやろう、多分落ち着いてゲートから逃げられねえだろうから逃走用につてつけだ」

「アレは人によってもだいい違いますから…どんなものが出るでしょうね」

「あの、土壇場で大丈夫ですか、アレって」

「…多分？」

「また行き当たりばったりデスカ…」

あの、本当に私はこの先まで生き残れますよね？出来なかったら見捨てて言ったりしませんよね？

…用済みだと言つてそのまま危険区域に放置されませんか？

とっても不安なのですが…

「まあ、はぐれても大丈夫なようにこれから軽くレクチャーしておいてやるからよく聞けよ？」

「どんなマテリアルもちゃんと攻撃に使えるスキルがありますからね、安心してください」

「あ、私にも一応単体技だけありますけど…」

「単体だけか…囲まれたらアウトかもな」

「あとは戦わないのでなにが使えるかよく分からないのですよ…」

船に揺られて戦闘講義開始、です…おかしいですよ、こんなことさせる位ならそもそも連れて行かないという選択肢が欲しかったのですが。

* * *

ひらけーごまー、といいつつくらウ・ハーツ>の世界間移動用のドアを開けると同時に私の横を風が二つ走り抜けました。
ええ、暴風が二つ、です。

「早速着たなっ!!」
「いつも通り、出迎えだけは早いようですね」

ドアの外には黒尽くめな服装をした人が集団でこちらを捕まえようと張っていたようで……開けた途端に二人とも私の横を通って集団をなぎ払いました。こんな入り口から集中攻撃されるってどれだけ危険な地域ですか、此处は。あと、お二人はいつから戦闘準備を始めてましたか？もうこんな襲撃なんてあつて当たり前ですか。むしろ用意して無いなんてありえないと？……………言ってくれませんか、そう言うことは。

「サムライソウル レベル4 マテリアル解放^{バースト}！」

「生命礼賛 同調位相1↓5 一聖天・降臨（マテリアル解放）」

「あ！は、ハーブクリエイト&ソイルチャージレベル4解放！」

困んできている敵を殴って後ろに下がらせながら二人がスキルを發動します。あ、私も急ぎ合わせて解放しました。…間違えて斬られても自分で回復してねとかいわれましたから、回復草一杯作って鎧代わりに纏っていきましょう。ずももつと。ルシアさんの戦闘状態は初見ですが……双剣士さんの戦闘は悪夢でしたし、ソレを上回るお人は如何程なのでしょう。私は草に埋もれながら生温く見守っておくのですよ。

戦場となり始めたゲート前広場には黒尽くめ集団とルシア&シドのペアが相対する。

手に手に刀剣類、銃器、爆弾に黒い瘴気などで武装した黒尽くめ達の様子と放つ殺気からあからさまに目的は強奪ではなく侵入者の排除だと窺える。しかし周りを完全に囲まれて逃げ場など無いこの状況ですら相對する者は意に介さぬように静かにイチコの前に立ちはだかり、飄々と微笑む。堂々たる態度こそが強者の証であるといわんばかりに。

森の時とは違い、シドの周りには張り詰めるほどの殺意と多数の大剣が展開。そのパートナーであるルシアもまた光り輝く純白のヴェールを纏いながら集団を一瞥する。一色即発の空気の中、交わされる会話は――

「あつちから仕掛けてきてるんだからもう良いよな？殺るぜー…超殺るぜー？」

「いいですか、あくまでも反撃に限る上、やり過ぎないように…ですからね？」

「まだダメ？」

「どんなにはやくてもカウンターが最初です」

「あのー…本当に帰っちゃダメですか、私」

「そうだな（そうですね）、少し離れてる（いてください）」

「ですよねえ……！」

……緊張感と言うものが欠片もなかった。

しかしそんなとぼけたやり取りを見ても囲む集団からの反応は皆無であり、静かに三人、いや二人を見続けるのみ。その視線は、初撃が外れたならば通さぬ事こそが使命と、度々己の庭を荒らしてきた二人の侵入者を捕らえて離さない。……こちらの方がまじめに戦闘に対して取り組んでいるはずなのに第三者から見ると少しばかり滑稽に見えるのは、相手の緊張感の無さが原因である。

「しかし、困ってきた割には仕掛けてこないな？」

「私には【スキル：絶対防御】、貴方には【領域：戦ヶ原】がありますからね。これで三度目の来訪ですし学習したんでしょう。初見で飛び込まない子は懸命ですが」

「あの……りょういきとは？また新しいワードが……」

「マテリアルが4レベルになった時に運営からのメール通知が着ま
せんでしたか？『4まで来たらこんなことが出来るぞ！』と言う件
名で」

「……全く見覚えが無いのですよー？」

「そうですね、帰ったら初心者に接するつもりで教育してあげます
ね。ーから」

「覚えるのは苦手なんですけどね……」

「自分の戦闘力を自覚しなさい。本気を出した時、無為に殺してし
まいますよ」

「はい……」

あ、ぶつぶつとスケジュールの調整を呟き始めました。敵前でそんなことしていいんでしょうか、襲撃とかされる元になるのでは……と
にかく、お二人が牽制――（？）している間に離れておきましょうか。

「なあ、ルシア？」

「なんです、今イチコのお勉強のセッティングを考えている所です
が」

「相手が動かないんだがこの場合俺から先制攻撃したら処罰？」

「……既に一撃貰いましたし。どうせ動いたら掛かってきそうです
から制限変更です。私の演説後はこちらから近寄って反撃を受けに
行くのはよし、あと得物だけ斬ってよし」

「ウイ、了解」

「イチコ、これから少し荒れますから先に市場を回っておいて下さ
い。ものの5分程度で追いつきます」

「は、はいですよ……叫んだら助けてくれますよね？」

「無論、大丈夫ですよ」

多分」

「今多分つていいました！？保証は一体何処に……！！」

「はいはい、大丈夫ですよ。すぐに片付けて追いつきますからね？」

「じゃ、とりあえず……連れが通るから少しだけ道、開けるや」

「言っておきますが……私達より先にその子に手を出した場合は、それはもう凄いことをしてしまいますよ？……シドが」

「俺だけかい！」

「ええ、貴方だけです。私は不殺がマテリアルの発動条件ですからね……そんなに酷いことが出来ないでしょう？」

「拷問まで俺にさせる気か？人使い荒いな、オイ」

「生きたままいつまで生きていられますかねえ……まあ、開けなければ私が撃ちこむだけですから倒れたうえ、後でシドにいたぶられたい方はそのままの位置でどうぞ」

しばし沈黙した後、に囲いの一部が開き、「通れ」と誰かが言い放つ。

「どうぞお通り下さいイチコ様、だろ？」

「こんな時に挑発はいりませんから……！！？」

「ほら、はやくお行きなさいイチコ」

薬草の塊となったイチコを集団の外に無理やり押し出すと、黒尽くめの集団は再び360度の囲いに戻る。

薬草ごと走って行く彼女を追いかけるものは幸いにも皆無。……居たところで二人の餌食となるだけだが。

「まとめて斬っていいならすぐにも行くんだけどな？」

「緊急事態であればそれでも良いですが。いつも言っています、私の前では基本的に不殺を心がけなさい」

「此処の人間なら全員PKなんだから問題無いだろ？」

「ただのPKであればまだ更正の余地アリです」

「俺は無駄だと思うがね」

「私はそうは思いませんから、ここに実例もありますし」

「……こんだけ群れてりゃ無理だろ、俺やエグゼスとは場合が違う」

「いいですか？」

「あ？」

「こういう事はやるだけやる、です」

「けっ、好きにしる。ただし失敗したらすぐに斬るからな」

「ええ失敗するまでは大人しくお願いします」

その言葉に対しシドは剣気を纏ったまま待機状態に入った。

素直に大人しくなったシドを見た後、ルシアは一人前に歩み出て宣告する。

「我ら冒険者ギルドは貴方達でも受け入れる用意がある！」

「……でも毎回説得失敗してるよな」

「外界に合わず、ただ流れてきただけの者が居るのなら我がギルドが迎えよう！」

「一応俺のギルドなんですけどー？」

「人と相容れぬ故、此処に流れてきたものよ。喜べ！我がギルドもまた異端の雑多なり」

「ハッハッハ、ギルドマスターからしてこうやって盗みに来てるからな」

「迫害を受けし者よ。我らがその比護の盾となろう！我らが爪を、牙を与えよう！」

「ただしある程度まではスパルタだぜ」

「私は虚偽を許さん！望まずに此処に送られたもの、悪事を償う覚悟のあるもの達こそ我が下へ来い！」

「あ、虚偽が発覚したら俺のマテリアルの錆にするぞ」

「生きる為に悪事を犯している者、全て我等が面倒を見てやる。我が手足となれ！」

「お前らー、聞き飽きたなら止めないとコイツずっと喋り続けるぞ？」

「今日はイチコのためにすぐに終えますよ。最後に、我らに牙を向くのであれば我らは容赦をせん」

「あ、俺は齒向かってきてくれると嬉しいな。そして俺に大量に斬らせてくれ！」

…最後の言葉にざわつく集団。なお、どちらの最後の言葉にざわついたのかはご想像にお任せする。

「5分で追いつくといいましたし…3分だけ待ちましょうか」

「一秒でも過ぎたら…Kill」

「流石にこの人数だぜ、軽く勝てるんじゃない？」「コレまでの三倍以上だもんな」「勝てるかな？」「でもいつも秒でボこられてるじゃん」「何者だよあの二人」「この人数より強かったらいつでも良いかもしれない」「ホントに守ってくれるのかな？」「少なくとも馬鹿強いなら此処にいるより平穩じゃね」「仕事の斡旋さえあればこんな所からおさらばするのに」「でも奴隷みたいに働けーとか言われたりしたら逆らえないんじゃない」「其処はちよつと怖いな」

「ちらほらと声が…一部ギルドメンバーになつてくれそうですよ？」

「あんな説得で迷う人間居るんだな」

「しかし何よりあの刀もつてる奴が怖い」

「シド、仲間になつてから苛めちゃダメですよ？」

「するか、ド阿呆！！」

「はい、言質とりましたから大丈夫ですよー、迷ってる皆さん」

「此処脱出する条件でちよつと労働と考えれば割に合うんじゃない？」

「まあ待て、まだ交渉が必要かもしれん」「しつもん！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「「「「「」

「ちょ、いだああー！」「ナニヲスル、ウワヤメ」「フーコ、愛してたよ…！」「いやあ、ジョニーー…！！」

「シド、今の子達はまだ交渉できそうです。殴られてる子以外を今すぐに薙ぎ払いなさい」

「お手軽必殺処刑スキル発動ー」

「…まじめに斬りなさい」

「チ、一人でも減らない方が斬れたのに」

文句を言いながらマテリアルでできた腰の剣に手を掛け、剣気を収束させる。刃が狙うは勧誘に反応したもの以外の集団全員。

「我が剣に、忒の太刀無し……レベル3【一撃の美学】発動」

握った刃を抜き放つと、広場が闇に包まれた。

* * *

こつそりこそり、ただいま路地裏潜伏中のイチコです。

先に市場に行っておいて、と言われましたが…正直場所が全く分かりません。集団から逃げたかったからとは言え、ちゃんと聞いておくべきでしたね。探してるうちに人とぶつかって怒らせちゃいました。失敗失敗、です。

「居たか!!」

「こっちはダメだ、ソッチは?」

「いねえから聞いたんだろが!! テメエん頭は飾りか!」

「んだと!!」

「やめんか、バカども! それよりあのアマ、何処に行きやがった!」

つまり……森のワールドに引き続き、またもや追いかけてます。気づいて無いだけで変な運命の糸でも絡まってるのでしょうか、私……現在、ダンボールを被って移動中です。便利ですね、ダンボール。……冗談のつもりで被りましたが意外と良い隠れ蓑かもしれません、コレ。

しかし、目の前で動いてるのに気づかないってどういうことですか、この人たち……実は馬鹿なんですかね?

「おい、其処のガキ! 緑髪のアマを見てねえか?」

「……」

「無視すんじゃねえ、其処のお前だ、お前!」

「ああ? ガキつてのはオレのことか、でくの坊」

「テメエ以外にガキはいねえだろうが」

「……誰に向かって口聞いてんだ、一山幾らの雑魚が」

あら、なんだか口は悪いけれど先ほど聞いたはずの声が聞こえます……?

「あんまり舐めた口聞いてツと痛い目にあわせんぞ。ボクちゃん?」

「無駄口叩いてねえでかかってこいよ、お前から仕掛けていいからさ?」

……んー、何処で聞いたんでしょう。森のワールドではこんな子供っ

ばい声は聞いて無いですし…ギルドの中に居た人は皆青年ぐらいの方でしたし。はて…他に人なんて居ましたかね。

「…おい、オメエら。死体はオレが片付けてやる、今すぐRPLKリアルプレイヤーキルを使え」

「……いいんですかい？」

「構わん、こんなガキは教育してやるのも大人の役目だろう？」

「ちげえねえ！」

「…常識を知らんガキには現実の厳しさを教えてやらんな。【殺戮領域】発動」

男が発動というと、何か又メツとした空気が広がるように周囲が嫌な空気に包まれていきます。

うー…危ないですけどダンボールの端を上げて男たちとにらみ合う少年に目を向けてみます。いい加減誰か気になりますし、今ならあつちに集中してるようですし…大丈夫でしょう。

「……PLK領域使ってくるなら、ちよつとオレも加減できなくなるんだけど？」

あ、くシエアリング・シティ>ゲートでぶつかった子ですか!?!さつき此処に飛んできてたの、聞き間違いじゃなかったんですね。

流石にこんな人数に小さい子供が喧嘩を売られるなんて…コレは、加勢した方がいいでしょうが、微々たるも手伝えそうですし…先程助けてもらいましたし。恩はちゃんと返すのが当然ですよな？

「5分だ、5分d「5分も持つ気で居るんだ?」…今すぐ黙らせてやれ」

「行くぞガキイ!!」

「そうはさせません!!」

「え？」

「は？」

ダンボールを上にはり投げて姿を現したイチコを見て、にらみ合っていた双方が呆然と視線を向ける。

まさか、ダンボールを被ってスク水モドキを着た年頃の娘が潜伏してるとは思わなかったのだろう、完全に呆氣にとられた姿で固まっていた。……端的に言くと、彼女はこの場に居る誰よりも怪しく、そして同時に一番滑稽な姿を晒していたのだ。

七個目 少年と一緒、ですよ

現状：ダンボールから出現したスク水女^{ビタビタスツ}に皆啞然としていた。

「あー！ーっ！このバカ女、何処に隠れてやがった！！」

「あ、さっきの姉ちゃん！なんでこんなところに！？」

「弱いもの苛めは許さないのでしょー！！」

「ガキ！もうオメエにや用はねえからさっさとどつかに消えな」

「いやいや、さっきまでだったら受け入れてたけど。今度はボクがあんた達に用が出来た！！」

「私が相手しますから、少年はお逃げなさい！！」

「いやいや、姉ちゃんもなに勘違いしてるか知らないけど逃げるまでも無いから！」

「ついだ。オメエら、このガキどもまとめて始末したれや！！」

「くくくおうっ！！」「くくく」

「やつかましいいい！！！！」

そして少年の叫びと共にその大混乱のまま戦闘へともつれ込む。イチコは先程から戦闘モードに入っただけであり、戦闘準備も万全。そしてギルドの二人から吹き込まれた彼女の通常攻撃とは……危険物の投擲である。

「【ハーブクリエイト：火草】大量召喚、ですよ！！」

ちなみに因縁をつけてきた男たちには先程も食らわせており、怒り心頭になった男たちが追いかけてきていたのだ。攻撃力の調整が上手く行かないのがアイテム攻撃の哀しさである。

「あちいいいっ！！俺の脚が、燃えるー！！」「めが、めがぁー！！！」

「潰さなきゃなんてことはねえ！さっきと同じ手だろうが馬鹿かお前は！！！」

「何物騒なもの使ってるの、この姉ちゃん！？ああ、もう 4 t h
ギア マテリアル始動」
アクセラレート

「少しでも減らして逃げるのですよ！」

「ここ、リアルに影響出る領域なのに…無茶するね！」

「どれだけ痛くてもゲームだから大丈夫です！」

「全然大丈夫じゃない！？さてはP L K知らないな、姉ちゃん？」

「なんだか悪者の空間ですよ、それなら知らなくても問題無いですよ！」

「何も知らない馬鹿が一番危険だー！！！」

少年と叫びあいながらひたすら火草を投げ続け、ジリジリと後退して脱出の機会をうかがっています。…一人づつなら時間をかければなんとか倒せるのですが、少年の為にも一気に倒してしまわないと。

「20個くらい火草頂戴！」

「何に、使うんですか！！（ばいばいばいばい！！）」

「お姉ちゃんに免じてあいつ等は焼くだけで済ませてきてあげるから、はやく」

「危ないことはだめですよ！？」

「本気出せるなら5秒もあればオレ一人で倒せるんだよ、あのくらい！！！」

「へえー、出来なかったら引つ張つてでも逃げますからね！！！」

「10秒まつて、【加速領域】発動！！！」

請われるままに足元に火草を適当に転がすとソレを掴んで少年の姿

がその場から消えました。

…いえ、唐突に集団の中から「ウゲツ!」「クキョツ?!」とか聞こえますから…超スピードで移動中でしょうか?

いきなり背中から発火してますし…凄い速さで火草を放り込み、服の上から叩いて燃やしてますか、彼?

Side ????

このお姉ちゃんに任せてたらきつと僕自身が危ない!

「10秒まって、【加速領域&ブレイクシュート】発動!!」

まずはPLK領域から逃れる為に自分の領域を発動し、PLK領域特有の嫌な空気を吹き飛ばしながら己の縄張りに書き換えていく。何もかもが遅く、全ての動きが鈍くなる加速の領域に。時間を一人だけ飛び越えていくような風の抵抗と思考の加速感覚に包まれながら火草を拾い、手短な男に走り寄る。

亀よりも遅く動いている—(実際には自分の感覚が加速している為)相手の背中に回って火草を数本まとめて放り込むなど超加速中であれば造作もない。加速を維持したまま更に他の男たちの背中に火草を入れ、ある程度深くまで落ちたところで、流れるようにスキルを纏った強力な蹴りを背中の中火草に叩き込んで着火してやる。

「無力化確認、^{ブレイク}マテリアル停止」

身体を覆う風の重さ、そして加速感覚が一斉に波が引くように減衰していく。

まあ、格好よく描写しようとした所で背景では背中を燃やしながらおっさんどもが転げまわってるのだが。

Side End

わー…何がおこってたかよくわかりませんでした…やっぱり凄い
ダッシュですか。
良いですね、超加速。何人たりとも俺の前は走らせねえ！！みたい
で懂れますよ！

「はい、お待たせ」

「これは…助けに出るまでもなかったようですね…」

「思いつきり僕からも喧嘩売ってて負けるわけないって。とりあえ
ずここ離れよ？」

「これ、放っておいて良いんですか？」

「平気平気、むしろハゲタカが集まる前に離れとかないともっと闘
うことになるから」

「…この世界にもハゲタカいるんですねえ…あ、段ボール回収して
きますから少しお待ちを」

「……気に入ってんの、ソレ？」

「意外と使い心地がいいですよ？」

「いや、満面の笑みで言うことじゃ……まあ自分がいいならいいけ
ど」

イチコはカポツと再び段ボールを被って少年の隣を歩き始めた。傍
から見るとダンボールを引き連れた少年は無駄に目立ち、何となく
見てるだけで可哀想な物を見ている気分させる。

「そっついや姉ちゃん、なんでこんなとこにそんないかにも襲ってく
ださいーって格好でいるのさ？」

「ちよっと…色々ありまして、つれて来られたと言いますか」

流石にいえません。まさかアイテムを盗む為に殴りこみにつれて来られたなんて。

「ああ…まだこのワールドに奴隷商人居たんだ……後でボコっておくからここから出たら一緒にそいつ探そう？」

「奴隷商人…？」

「アレ、違った？てつきり此処の禁制品に引っ掛けられて連れて来られたんだと思ったけど」

「あ、いえいえいえ！ただよく分からないうちに此処に連れられてきましたから」

「そつか…催眠香か何かかな…ま、此処出てから落ち着いたら詳しく話してよ。今はあのおっさん達のせいで心臓バクバクだろうし」

「は、はいですよ…」

「とりあえず僕は市場に行くけど、ついてくる？見たところそんなに強くないみたいだし、一人だと危ないかもしれないし？」

「……また追いかけられるのもゴメンですから御一緒させて頂きマス」

見知らぬ子供ですが一緒に居たほうが安全確保できますから…それに見た目的に放っておくのも逆に心配ですし…この子が万が一にも人攫いの一味ならどちらにせよ逃げ切れませんしね、市場に行けばきつとルシアさん達も居るでしょう…あの、5分以上経ってますが市場に居なくてお仕置きされませんよね？

「あんまり遅いとおいてくよー？」

「ちょ、待ってくださいーい！！？」

早ッ、スキル無しでも走るの速ッ！運び屋って自分自身が速いものですか！？

慌ててダンボールを押しながらさっさと追いつこうと猛ダッシュで

追いかけます。

* * *

再び横に並んでしばらく歩いていると喧騒に包まれる大きな通りに差し掛かりました。

まあ、喧騒とは言っても…「あら、コレ盗みたて？」「もってけ泥棒！」「コイツ、うちの商品盗みやがったな！」「とろいのが悪いんだよジジイ！」とか、そういう物騒なやり取りですが。

あ、なにやら銃声が聞こえました。意外と近いのに皆さん動じてませんね？

しかし…これはルシアさんを探すだけでも大変そうですね。とにかく皆動き回ってますから、全員の顔を確認できないのですよ。それにこの中にスリも居るようですし…というより今まさに少年がスピードスキル（少年のマテリアル）をフルに使用して通行人と店の隙を突いて盗みに走ってますし。

「…つと、お待たせ！これだけ有れば元の世界に戻っても不自由しない金額はあると思うよ」

「両手一杯の金貨…なんというスキルの無駄遣い、ですよ」

「奴隷にされてたならお金、持って無いでしょ？これから帰るのに要るかも知れないし取って来て上げたんだけど…要らなかった？」

「お、お金は確かに無いですが。多分一緒に来た人たちと合流できればどうとでもなるのですよ」

「あ、他にも連れて来られた人がいるんだ…」

「実は連れてきた人といいますが…」

「え？」

「随分物騒な市場ですね、と。めまぐるしく人と物が移動してま

すし」

「ああ、すごいでしょ？盗んだものを売りさばく所なんて此処だけだよ」

「…何でも揃いそうですね…此処は」

「何でも盗んで持ってきて売りつける。ソレが此処の商売だからっ、モノがあつて当然、らしいよっ！」

不意に近寄ってきた男（スリの一味）を蹴り上げから踵落として地面に埋め込みつつのんびりと市場を歩く少年…まだ名前聞いてませんでしたね。

「どんだけ無法地帯ですか、此処は」

「PLK、つまりリアル・プレイヤー・キラーがそこらの路地裏でも展開されるぐらい危険な世界だよ、此処？」

「なにやら物騒な単語が…なぜゲーム内でリアルキラーなんです？ソレこそただのPKでいいと思いますが」

「あ、PKはゲーム内で死ぬただけけど、PLKだと現実の身体も怪我するから」

「はい？」

「ギルドとかで聞いたこと無いかな、しばらく入ってこれなくなつた怪我人の話」

「…半年続けてますけど初耳です」

「知らぬまま…次からPLK領域で戦闘しないで欲しいな」

「ギルドに戻つたらお勉強なのですよ…みっちりと」

「たまたま僕…いや、オレが見つけたから良かったけど」

一人称言い直しましたね、大人ぶりたいお年頃なのでしょうか？

「そう言えば私は森のワールドですけど、少年はこの人ですか？街の方でもぶつかりましたし」

「森…<ラビリンス・フォレスト>かな？ん、僕は<シエアリング・シティ>が拠点だよ」

「此処へはお仕事で？」

「ちよつとギルドのサブマスターから頼まれごとをね」

「ふむふむ……何のギルドですか？」

「冒険者ギルドだよ？」

<シエアリング・シティ>の冒険者ギルド、いくつもあるのでしょ
うか？

確かこの子は運び屋で、ルシアさんが探してたのも運搬出来る人で…

「……………」

「どうかした？」

「失礼ですがお名前を聞かせてもらっても？」

「え、さっきも言っただけどギルドに行ったら<運び屋>で伝わるよ
？」

「いえ、本名を知ると状況が変わる気がしまして」

「名前だけで何の状況が変わるのさ？」

「…名前を聞いてからお伝えします」

「まあいいけど、オレの名前はエグゼス。<運び屋>エグゼス・ラ
イダー」

「……………」

「お姉ちゃん？」

「……やっぱりあのギルドのメンバーですか……………」
「……………」

大きな喧騒に包まれる市場に、ソレを上回るイチコの叫びが木霊し
た。

『イチコ、エグゼスと合流』

*その頃のシド&ルシアペア

「店主、ソッチを相手してる間にもっと持っていかれてますよ?」

「放つとけよルシア、巻き込まれたらメンドイ」

「ですが…「お前らもあのこそ泥の仲間かあ!!」」

「ほらな? やっぱり絡んできやがった」

「…すみません」

「盗んだ分の代金、払っていけえ!!」

……市場の片隅で店主に絡まれていた。

八個目 覗きは趣味じゃない、ですよ

通りすがった少年がルシアさんの探し人でした。

他人を助けてくれるのは外部から来た人だけでしょーし、そういう出会い方ならまだ不自然な気持ちも抱きませんでしたけど……ただ通りすがっただけって、ちよつと都合主義過ぎません？だって結構人が多い混沌とした街ですよ？どう考えても普通通りすがれませんかー！！

「いや、だって裏路地の方が空いてるし走りやすいから」

「空いてるから通ると言っても限度があります！裏って言ったらどう考えてもヤのつく人がたむろってましたよ？！このダンボールがなければどうなっていたか……！」

「お姉ちゃん……さっきからダンボール万能説でも唱えるつもり？」

「しかし冒険者ギルドの人は、なんでこんなに強い人ばかりなんですか……」

「だってギルマス（ギルドマスター）からして強い相手探してるしー？」

「明らかにゲームにのめり込み過ぎですよね！！？」

「……このゲームの裏を知ったら、お姉ちゃんももっと強くなろうと思うよ。多分ね」

「裏事情なんて知りたくないのですよ」

「知らないで過ごせたなら、とっても面白いゲームなんだろうけど……」

なにやら遠い目をして思考の海に潜ってますか？エグゼスさん、またスリがきてますよー？

……呼びかけても反応無し。コレは危ないですね、しょうがないので

私が追っ払ってあげますか
せえのっ!!

「ダンボールクラッシュ、ですよ」

「ぐへあっ！」

「知って良いことがある訳でも無し…ん、【スライドシュート】！
！」

「スキル使いますか！？ああ、一撃でスリのHPが…」

「え、スリ？いきなり突っ込んでくるから敵かと思って」

「エグゼス、恐ろしい子！なのですよ」

「ダンボール被って自在に動き回れるお姉ちゃんと比べたらまだまだだよ…」

「てへっ」

「ダンボールの中でやつても可愛くないよ、お姉ちゃん」

Side シド

「店主、私達はそんなこそ泥とは仲間では有りません。ただの誤解ですよ」

「人を置いて逃げ出すようなやつは仲間じゃないってか！こそ泥は
どいつもコイツも…」

「ですから、元々私達に商品を盗もうだなどと言う意志が無かった
んです。お分かりですか？」

「こそ泥の言う事が信用できる訳が無いだろうが？」

「何度言えば分かってもらえますか。ですからまずその認識が間違
いだと」

「まだ認めん気が、いい加減に観念せい！」

「何故分かってくだらないのですか！いい加減に現実を——」

「おーい、おっさん？」

「何だ、小僧！」

「ドンドン商品盗まれてるがソツチの話に白熱してる場合か？」

「またか、このクソガキども！！」

…このおっさん、馬鹿だろ。実は超馬鹿だろ？一人捕まえるの優先し過ぎて結果的に大損こく馬鹿だろ、このおっさん。

「…分からず屋ですね、此処の主人は」

「なあ、ルシア」

「なんですか、今あのおじさんをどう論破してやろうか考えている所ですが」

「…実はお前も馬鹿だろ」

「ええ、馬鹿ですが？」

「あつさり認めんな！？」

「そんな些細な事よりも…今はただあのおじさんに勝つことが重要です」

「ハイハイ、突き抜けてバカやる前にイチコ探そうぜ…見つけたら好きなだけ論破してて良いからさ。な？」

「シド…私は謂れ無き叱責が何より嫌いです」

「…なら好きにしてろ、俺が周り見といてやつから」

「頼みます。私はまだここから離れられません」

「凄く下らない理由でな！！」

あ、おっさんも追い払い終わったみてえだ。

…待ってても暇だしこの通りにレベル5必殺技使ったら気付いてエグゼの方からこねーかなー。

ルシアにバレたらことだから出来ねえけど。

「このアマ、自分から囿になって更に盗みを働いたあ…とんだ食わせ者だ、とっちめてやるからこつちに来い！！」

「だか「…きゃっ!？」」

「きゃっ」つかまた珍しく悲鳴なんかあげて……あー、おっさんが掴みかかってんのか、ヤレヤレ。自分であれぐらい追い払えるだろうつになに素直に議論してるんだか。

「オイおっさん？」

「邪魔をするな、小僧。こんな女はとっちめてやらんといかんからな!！」

「とっちめるのは良いが、先に言っておくと既に間合いだからな!？」

「関係ない坊主はひっこんどれ!」

「イヤイヤそいつ、俺の連れだぜ?俺のギルドの人間、つまり俺の所有物 関係大有り!」

「ふん!ならお前がしつてもできんようだからワシがしつかり身体に教えてやろうとしとるんだ」

「はっはっは、面白くもないこと言って笑わせるなよじじい!。拳固一発二発で十分だろ?」

「シド、私がやりますから貴方は先に探しに行きなさい!」

「所有物からは振られたようだが、小僧?」

「……ルシゝア……」

「一人で十分ですから」

「さあこい、このアマ!店の奥でたっぷりお仕置きしてやらんとな」
「ッ!」

ア?てめえ店の奥に無理やり引つ張って?引つ張っていつて何するつもりだ、だらしねえ顔してるしナニか?つか腕強く握んな、跡が残ったら消せねえだろうが。まず誰の許可を得てソイツ汚すつもりだ?あゝゝゝ、もういいよな、下手糞な悪人ロールに付き合ってイライラしないで?もうこのスケベじじいぶった切っていいだろ、

問答無用で二刀目使ってさ。

「マテリ……レベ……動」

「んん……何か言ったか？ いや、この刀は何のつもりだあ？」

「だから、止めなさいシド！」

「却下……手を放さんと殺す、ってか動けば殺す。確殺する」

「ガキはすぐ殺すクロス言いおって、そんな簡単に殺したら後がどうなるか分かって言ってるのか。このアホはっ！」

「いや、俺としては今更ゲーム内で――否、外でも一人二人殺したところでそう変わり無いし？」

「どいつもコイツも……ワシに手を出せばボスが黙ってねえぞ」

「まとめて殺してやつから呼んでこいよ、な？ どうせそいつも弱いんだろ？」

「ふん……今日はこの店に予定があつてな、すぐにボスもお見えになる」

「シド！」

「おいおい、止めんなよルシア……いい加減俺はこのおっさんにうんざりしてる所だ。ここに至ってお前に危害が及ぶなら、もうぶつ殺しても良いレベルだろ。ここがPLK領域でも全く止める気になれない。いや、それより何より誰にも聞いてやがる、このジジイ……」

「……さつさと女のほうがこっちに来て仕置きを受ければ今のは聞かなかったことにしてやる」

「お仕置きいいい？ 散々イタズラしてクスリに漬け込んで正気なくしてそこらに放置するの間違いだろ？」

「……む」

「……仕置きならここで出来るだろうが」

「店の中を掃除させるだけだ！ コレならおかしくあるまい」

「盗まれた分を弁償するのに一体どれくらい掃除させる気だ。こんなせつまい店だったら一時間もかからねえだろ……そんな店で給金幾

ら出すつもりだ？　そもそも更に盗まれそうな奥に上げるのがおかしいだろーが」

「むぐっ」

「シド、いい加減に……」

「そうだな、いい加減トドメさすか」

そう言い放つとシドの右腕が閃き、店主が床に落下し始める。

断面がとても滑らかな九つの肉塊と化して。

「……貴方……！」

「もうプチプチきてたんだっつの……！」

「私は出発前にお灸をすえる程度にしなさいと言いました！殺人までは許していません……！」

「こんなスケベじじい殺しても許せんわボケエ……！ちつとは俺の気持ちも汲め！」

目の前で唐突に解体された人間を見て即座に食って掛かるルシアに対し、シドも負けじと叫び返す。

両者が険悪な空気を漂わせながら睨み合い、シドがまた口を開こうとしたとき――

「……嫌いになりますよ？」

「わかった！俺が悪かった。ああ全面的に悪い！降参降参　参った……！」

「……次はありませんからね」

「お前の為なのに……」

「だったら約束ぐらい守りなさい！」

いや、だってさー普通彼女が変なオヤジに絡まれててそのまま傷物

にされそうだったらボコらねえ？
これがリアルでも一緒にいる恋人なら……普通守るだろ？

「ここの主人には悪いことを……」

「えー、常習犯だろ。変態の」

「それでも斬つてはいけません、私がやるから良いと言いました！」
「万が一があつたら困るだろう！」

「私はそこまで弱くないです……！」

「ちつとぐらい守らせてくれたって良いじゃんよ……！」

あーもう、睨むな睨むな！確かに守られる状況がくるのを望むこと
自体不謹慎だが。

S i d e E n d

あ、ようやくカメラさん帰ってきました？こちらイチコインダンボ
ールですよー？

なんだか今要らない知識も少し増えた気がしますますが気のせいですよ
ね。

「……あの二人、恋人同士ですか……双剣士さんへの対策はコレで、
ふふふ」

「お姉ちゃん実は電波な人だった……？」

「へ？あ、なにかいいました……？」

「……いきなり何処から電波受信してるのさ」

「はい？」

「いきなり立ち止まってブツブツ言い出して……グロイッ！？とか、
店員に大人気ない……とか」

「失礼、それはこっちの話です」

「傍から見てて…怖いよ、お姉ちゃん」

「ちよつと覗き見してただけですよ、大宇宙の意味と言うものを！」

「ゴメン、僕急用が！」

「嘘です嘘です！！冗談なのですよ！！」

閑話休題

「ああ、お姉ちゃんのスキルね…ちよつとマジもんかと思っちゃったよ」

「私は常識人です！」

「常識人はスク水着て物騒な通りを歩かない、ダンボールを被って落ち着いて移動しない、知らない子供にのんびりついて来ない！！」

「……………御尤も」

「で、その覗き見のスキルってどんなの？」

「【ソイルチャージ】の解放レベル3以上なのですよ…覗くのは副次効果ですけど」

「ソイル…土にHPでも溜め込む代わりに記憶が読めるとか？」

「いえ、そうではなく…このスキル、HPを溜め込むだけじゃなく逆に引つ張りだせるのですよ」

「…HP貯蓄？」

「はい、レベル2以上だとついでに他の情報も読み取れるようになりまして」

「つまり3から土の記憶が？」

「そうです。森のワールドでは性質上、遭難者続出しますから…救助が正しい使い方なのですが」

「……悪用も出来ると」

「はい…」

「で、悪用したと？」

「…うぐっ」

「拳固一発ね？」

「お代官様、お慈悲を〜です！！」

「ダメ！ハリセンスマーッシュ！！」

「ソレ何処から出しましたkはぐっ！！」

唐突な衝撃で視界の隅で星が弾けました…！っていうかダンボールごと叩かなくても良いじゃないですか！！今ダンボールがあるから本気でいいや、みたいな気持ちじゃありませんでしたか！？何より拳固一発じゃないですよ…思いつきり凹んでますし！

「お仕置きはコレでいいとして、せっかくだからそれでルシア探そうよ？シドは下手に近寄ると『ズバッ！』だから」

「さっきの記憶の中に丁度居たのですよ…此処から少し離れてるだけの場所に」

「よし！逃げられる前に捕まえに行こう」

「ですから置いて行かないで下さいーそれに場所言ってますんよー！？」

再び走り出したエグゼスを追ってダンボールを被ったまま走り出すイチコ。

つまり、少年を追いかけて疾走するボロいダンボール…その様子を見た人々が後にこう語る。

このワールドで動物を捨てると、子供が捨てた小動物の念が宿ったダンボールが新たに捨てる者を呪殺せんと追い掛け回してくると。

九個目 合流及び勉強タイム、ですよ

S i d e ルシア

……流石にコレはダメですね。回復アイテムも無いですし、何より完全に死んでますから。

「もうほつとけよルシアー 多分それただのエロ親父だぞ？」

「あっさりと殺しておいて何を言いますか、このおバカさんは……どんな人でもコレはやり過ぎです」

「P L K 領域内だったら自重するけどなあ、どうせ一時間もしたら生き返るって」

「……死ななくても復活するまで痛いんですよ？ 激痛が一時間も続くんですから……やり過ぎです」

「はいはい。んで手、大丈夫か？」

「平気です。急に引かれて驚いただけですから」

「……本当にか？」

「N P C でも無い限り私に傷を与えられる人間なんてそうはいませんよ、分かってるでしょう？」

「万が一が合ったら嫌だと言ってるだろ」

「私より、イチコの方が危ないですよ？」

「……位置は大体掴んでるぜ」

「間に合うと保証できますか？」

「うむ……街ごと斬っていいなら必ず」

「却下、斬らせる位なら早くイチコを迎えに行きましょう……この店主が生き返るまでは暇ですし」

「……いや、わざわざ行かなくともこっちに向かって来てるようだ」

「エグゼスもちょうどこちら向きに進んで来てますね。覚えのある

「マテリアルの反応がすぐそこまで」

「反応の識別、便利だな……その生命礼賛のスキル」

「あなたの鎖ほどではありませんよ、ただ相手が分かるだけです」

さて、迎えに行くのが5分を超えてしまいましたけれど……イチコは許してくれるでしょうか？

植物アイテムの精製はHPを少し削ることを覗けば割と戦闘向きのマテリアルですから襲われても平気だとは思いますが……つい議論に熱くなってしまうのは私の悪い癖ですね。次は気をつけましょう。

「次が起こらない事を気をつけようぜ？」

「…人の心を唐突に読まないで下さい」

「だって顔に書いてるし」

書いてません、出てません、そんな分かりやすい表情はしておりません。

「冗談だろ？」

だから読むんじゃないありません！

Side
End

み、皆さん……こん、こんにちです……！ただいま全力疾走中のイチコです……！！

「だーかー！早すぎるってさっきから言ってますよー
ー！！」

「お姉ちゃんが遅いんだってばー！ー！」
「待ってくださー！ーい！ー！」

全力疾走するダンボール…とてもシユールな光景になっていること
でしょう、今の私は…
あんな速度で走られたら私じゃとても追いつけないのですよ…と、
ととと！？

「よし、前方にルシア見つけ！ー！」
「ぎにゃー！ー！ー！」

「ああっ！なに寝転んでるのさ、早く行かないとまた見失うよー！」
「む、無茶言わないで下さい！ー！ー！」

足を挫いて、りよ、両膝から地面に激突したのですよ…地味な痛みが足先から上がって来て…くあああ…とてもじゃないですが立てるような状態では…ああああう。

あ、エグゼスさん戻ってきました…恥ずかしいですが肩を貸してもらうしか

「あー！ー！ー、もう！ちよっと我慢してよね！」
「ハイ…？」

「背負うから」
「えっ、エグゼスさん？」

「不満は後で聞くから、全力疾走！ー！ー！ー！」
「ちよっと、まっ…人間ジェットコースターですかあー！ー！ー！ー！ー！」

S i d e シド

なんかあっちの方…… 凄い土煙上がってるな。

「ルシア、エグゼスの反応は？」

「凄い速さで向かって来てますね…… 恐らくあの土煙の発生源かと」
「あの煙が出だした途端こっちの反応も格段に速度が上がったんだが」

「……何が言いたいんですか？」

「……言わずとも分かるだろ？」

「……ええ、恐らく」

「何があったか分からんが一緒にいるよな、多分」

「どこかで合流していたようですね」

「この調子なら接触まで後30秒って所だな」

「……こっちに気がついていいるのでしょうか？」

「さあ？ 前に出れば嫌でも気付くだろ」

「……私が止めますね」

「不本意だが頼む、多分俺だとアイツついでとばかりに蹴ってくるだろうし」

「……いい加減仲良くしたらどうです？」

「仲良く腕試ししててこうなってるんだがなあ」

「難儀な性格ですね、二人とも」

大丈夫だとは思うが、一応俺もマテリアル使っておくか。不意に蹴られたらあぶねーし

「イーーーーーヤああああーーーーー！！！」

「お姉ちゃんうるさいってばー！」

「速い、怖い、痛い！ 助けてーーーーー！！！」

「一分ぐらい我慢してよね！」

「せめてロープか何かで固定してくださいーーーーー！？」

「都合よく持つて無かったからね、そんなもの!!」

「運び屋ですよー!!?」

「ああ、ぶあつつい強化ゴムでハムみたいになりたいなら使っけど?」

「見た目より安全第一ですよー!!」

「やっぱりそうみたいだな、ルシア」

「……近所迷惑ですね、この喧騒にも負けないとは」

「止めれるか?」

「エグゼスは確実に、イチコは不確定ですがきっと大丈夫でしょう」

「まあ、失敗したら俺が止めるわ」

Side End

流れる光景とぶつかってくる風圧が相まってどのくらいのスピードが出てるか良く分かりませんが、ひ、膝が限界を訴えて来ているですよ!!

「降ろしてー!ーですよー!ー!」

「あ、ルシア受け止めてくれるんだ?」

「なんですよー!ー?」

「ほら、前に立ったから」

「危ない、危ないですよー!ー!」

わ、ホントに目前に!?!流石に撥ねられてしまうのでは…人間相手に撥ねるって言うのは言い過ぎかもしれないですが、相当な威力がありそうですよ!?!?あー、ぶっく

「イチコ、心配せずとも私の盾を破れる物はそうそうないですよ」

凜とした声が疾走する爆音の中で届く、そして

「んじゃ、いつも通りよろしくね!」

「任せなさい。我が手に止めきれぬものなし、です」

宣言に続きルシアの広げる両手に光の粒が集まり始め、同時に反比例するように急激に視界を闇が覆い始める。そして目も眩むほどとなった両手の光は迫り来る二人に向け、障壁として展開した。

「【柔崩障壁】」

「んっ…と」

「にゃーーーーっ!!?」

眩いばかりの障壁に触れた部分がクッションのような質感を持って受け止められたのが分かる。……エグゼス「だけ」。
一方のイチコは光の障壁をすり抜けてそのままルシアの真後ろまで弾丸のように飛んでいき、念のためにと待機していたシドに受け止められてようやく止まる事が出来た。

「……あら、すり抜けましたか」

「看板に偽りありだな。止め切れてねーじゃん」

「ルシア姉、眩しいからコレ消してー?」

「失礼、すぐに」

* * *

「意外だなあ 弱い弱いとは言ってたがまさかモンスターすら倒したこと無いのか?」

「森の中で…あんなでっかいもの倒せる訳無いじゃないですか!!」

しかも群れでやってくるんですよ？」

「マテリアルのレベルが高かったので少しは狩りをしているものと。イチコ、本当にすいませんでした」

「謝られるような事でも有りませんけど…むう」

「と言うか、この死体なんで片付けてないのさ…」

「文句があるなら自分で奥にけり転がしてろ」

「シド……？」

「喜ンデ奥二運バセテイタダキマス」

「双剣士さん弱いですねえ」

「うつせえ！」

はい…場所を移して先程の店長（？）が転がるお店の中で休んでます。

双剣士さんに受け止められて何とか止まりましたが、転んだ両足が未だに治りきつてないので治療と休憩をかねて血の香る店内でティ―タイムです。正直……全く気は休まらないのですが。

「何故、こんなところで…お茶会をしてるのでしょうか」

「シドがやりすぎましたから、復活後にその旨の謝罪と…ボスと呼ばれる存在が居るようですから、この際そちらから融通して頂こうかと。そのための暇潰しですよ」

「……アレ、生き返るのですか。ズツタズタですけど」

「ベタベタくつついて復活しますよ？当たり前じゃないですか、普通のオンラインゲームなんですから」

「…想像するだけでグロイですよ」

「エグゼスー？」

「なにさ？」

「街のワールドの半分…ラウ・ハーツと言うかこっち側に今ボスなんて呼べる人間居るか？」

「さあ…僕もルシアの所に来てからは此処の裏には潜れなくなったし」

「…ちつ、役立たずめ」

「ひどい！？自分も知らないくせに」

「少なくとも此処はただの悪童の溜まり場でまとめきれるような頭は居なかった、ぐらいい知ってるぞ」

「じゃあ、前にボスが居たけどその人は？」

「そうだなあ、ルシアにのされて他のワールドに入り浸ってると思うが」

「……アレ勝てないって」

「取得条件が難しいからツエエの何のって…俺も結構レベル上げないと斬れなかったし」

「僕ら割とゲーム内屈指の猛者のはずなのにね…」

「相性だよ、相性…」

「黄昏てますね、男性陣」

「放っておきなさい。ボスとやらが来るまでは問題ありません」

「了解なのですよ」

「ついですから、この間に少しだけお勉強しましょうか？」

「い、今此処ですか！？」

「基本事項を何点か、押さえておくだけですよ」

「あうあうあう」

「脱出用の移動法も教えておかないとまた逸れたら危ないですし」

「はいですよ…」

お勉強は嫌いなのですよ…わざわざゲーム内で細かい事を覚えなくても良いのでは無いでしょうか？だって、だってゲームですよ？取り説も見ずに楽しむのがゲームじゃないですか！

「さて、それでは説明を開始します」

「……」

「……返事は？」

「ハイツ！よろしくお願いいたします」

「よろしい、では基本としてワールドMAPからいきましょう。エグゼス、其処の壁の地図を」

「はいさー」

「ありがとうございます。イチコ、この地図を見てください」

「……なんですか？ただ盤面にビーダマが転がっているようにしか…しかも一個真つ二つになってますし」

「このビーダマ一つ一つがワールドです」

「森のワールドの地形、丸くないですね？それに、世界間移動する時にこんなビーダマは見えませんでしたか……」

「正規の移動手段はトンネル内を飛ばされますからね、夢が見れるような綺麗な風景だったでしょう？」

「…トンネル？」

「ええ、先程の船も実はトンネル内を流されてこちらに着いただけですよ」

「つまり、トンネルを通らなければ」

「ええ違う風景になりますよ。ビーダマでは分かりにくいでしょうから、惑星みたいなものだと考えてください」

さつそく良く分からないこと言われたのですよ？星とか宇宙空間のスペースがサーバーの無駄遣いにならないのでしょうか。

「今はいくつものワールドがあると認識していただければ結構です」
「はい」…」

「では次はマテリアルの簡略説明に」

「簡略です…？」

「まだ運営側からの調整が入ることが有りますから、私達にも厳密なルールが把握できていないんです」

「このゲーム、かなりグダグダですか？もしかして」

「…コレばかりは運営側の責任では無いといえますか、まとめて説明しますが一部では現実とゲームがシンクロします」

「ゲームのやりすぎでいつでもお花畑な人になるということですか？」

「ソレはただのゲーム中毒者です。説明を始めます、強制的に」

「真顔で突っ込まれると哀しいのですよ…？」

「まずマテリアルのレベル、成長ではなく解放レベルですから最初から実は上限が決まっています」

「どんなに頑張っても誰が使っても、同じモノなら同じ最高出力ですか？」

「はい、誰が使おうとも同じマテリアルであれば最高威力は同じです」

「……同じ種類のスキルなら一緒です？」

「同じスキルであれば所持しているマテリアルの大きさ次第です。当然大きい方が秘めている力は強大ですよ」

「ほわ…暑いわ重いわ邪魔だなーぐらいにしか思っていないんですけど、このグローブもそこそこ大きいマテリアルですね。皆さん指輪とかイヤリングでしたし」

「ソレはソレは…」

「ルシアさんは何がマテリアルですか？」

「余り言いふらすものではありませんが……この服が一つですね」

「……シスター服ですか？」

「ええ、他の二つは内緒ですけど」

「服…でつかいですね…」

「続けますよ？」

「あ、はいです」

「このレベルは1〜5まであります。レベルが上がるにつれてスキルの威力と制御力が上がっていき、ついでに少しずつ特典が付きます」

「…特典ですか？」

「そう、特典です。此処に来る時に貴方はいずれかのマテリアルが2レベルあるか聞きましたね？」

「船の上ですね、2レベルの特典が何か関係するのですか？」

「関係、と言うより特典そのものが移動手段になるんです」

「はい…？」

「形状は定かではありませんがとにかく飛ぶものですね」

「よ、よく分からないのですよ？」

「帰るときに、何でもいいから移動手段を頭の中で浮かべなさい。ちゃんとマテリアルを使いながら、ね」

「むむ…」

「そして3レベルでスキル固有の必殺技、4レベルで自分の領域の作成、5レベルで領域内限定の範囲必殺技が使えるようになります」

「必ず殺すと書いて必殺！」

「レベル3がいいですか？それとも5？」

「失礼しましたっ！先にお勧め下さいルシア様」

「良い態度です。此処までは普通のゲーム枠のお話でした」

「まるで普通じゃないような言い方をしますが…」

「本来ならギルド外の人に気軽にばらすコトではありませんが、面白そうなので貴女には教えてあげましょう」

「傍迷惑な認定を受けていませんか！？」

「いい笑顔を維持したままルシアさんが放つ一言を聞くまいと両手で耳を塞ぎます。

「実は5よりなお上の解放レベルもあります」

「…それは二次職みたいなものなのでは？」

「構えた割には…たいしたこと無いコトでした！！」

「いえいえ、二次は二次でちゃんとマテリアルが変化することなれますよ?」

「はい…?今日はなんだかコレばかりですよ…」

「5レベルに達して更にマテリアルを所定の場所、ジョブ変更の場所に行けばまた新しいマテリアルに作り変えてもらえます」

「あ、俺も既に二つ作り変えてるぜ。二回変えたのは現サムライソウルだけだ」

「えー・・・と」

「スキルのオーバーリミット、大きさの制限を無視した力を発揮できるようになる反則技ですよ」

「と言うか強すぎて使いづらいだろうな、普通」

「普段から使っているのは…海の姫ぐらいでしたか」

「あそこはソレぐらいしないと追いつかないだろ、情勢的に」

「海の姫ですか…?」

「割と有名だと思いましたが、イチコはまだ知りませんか。では今は勉強を優先にしておきましょうか」

「このゲームを長く続けるのならいつか使うことになりますよ。レベル5を超えた二つの段階を」

「伏線っぽく張らなくていいですから説明してくださいよ…なんですか、それ」

「うふふ、使ってみてのお楽しみです」

「とにかく強い、反則、無茶、チート、オレTUEEEE（笑）だぜ!」

「滅茶苦茶ダメそうな気がしますね、双剣士さんの説明だと」

「シドの場合…そんなもの使わなくとも既にプレイヤーの頂点に居ますからね。顔はあまり知られていないようですが」

「いえ、知られててもあんまり強いと思われなと思いますですよ…」

「ンだとゴルァー!!」

「恋人に頭の上がない男の子ですし？」

「ぐぬっ…！」

「ちよつと僕紅茶作ってくるね、このおじさん起きたら僕の名前出して黙らせておいていいよー？」

「インスタントでいいですから早く戻って来て下さいね」

「りようかい！」

「さて、次は何を説明しましょうか？余りこういうことはなれていないので順序がおかしいかもしれませんが」

「あ、シンクロって結局なんですか？」

「レベル5以上またはP L K領域内においてP LとP Cの精神と肉体が同調することをさします」

「つまり…」

「つまり、ゲーム内で怪我をすると現実でも程度は落ちますが怪我をします。死亡すれば…昏睡状態になりえます」

「強い代わりに代償も高いのがスキルのオーバーリミットの効果ってコトだな」

「絶対に使いません、使えませんよそんなの自殺行為じゃないですか…！」

「そうもいえない状況が来る。そんなこともあるんですよ、イチコ」
「俺も一回ソレ使って戦ったしな」

ルシアさんから、目を伏せて何かを悼むように静かに告げられました。

たかだかゲームで…そんなコトをする必要があることって…なんでですか？

S i d e エグゼス

「気付いてないだろうなあ、お姉ちゃん」

一人インスタント紅茶を4人分用意しながら呟く。

「シンクロしてる時に能力が一番強くなるって事は」

シドの分だけ出廻らして入れてやり、勝手に借りた厨房を後にして。

「現実の身体がそのスキルを使えるってコトだって」

十個目 実は超電波、ですか？（前書き）

インフルでしばらく寝込んでしまいました・・

この小説を呼んでくださっている方はお待たせしてしまい申し訳ありません。

…では、また少々の暇潰しのお供となれますように。

十個目 実は超電波、ですか？

お勉強…にしても危険な情報をあつさり喋られましたけど…大丈夫ですよね？

コレ、知ったら命を狙われるような情報では無いですよ？

「御茶がはいったよー？」

あ、ちょうどいいタイミングで少年が戻ってきましたね。

…もしかして測ってましたか？

「急がないと全く飲めないかもしれないからすぐ来ただけなのに」

「ナニモイツテマセンヨ？」

「先程から感じていましたが、イチコは思考が口元からただ漏れですな」

「これでよく周りの人間を敵に回さなかったな？」

「生温く見守ってたんじゃない？」

ぼそぼそ言ってるつもりでしょうが全部丸聞こえですよ？

全く失礼な……しかしうつかり漏れてましたか、気をつけないと。

「ふう、インスタントはインスタントでいいものですね、この香り」

「あ、ルシア姉の分はキツチリ淹れてきたから」

「俺のなんか凄く薄い気がするんだが？」

「シドの分はルシア姉の出廻らしで入れてきたよ」

「…んー、『エグゼス、テメエは俺を怒らせたー！！あるていめつと・はん・ばー・ぐー』」

「ちよつと、ソレ別のゲーム（じゅつ」

「…悪は滅びろー」

「傍から見るとパシリ苛めてる不良のリーダーにしか見えませんですよ。」

「シド、暇なら奥に氷石が無いか調べてきなさい。もしボスとやらが此処に来るのなら殴り倒してすぐに撤退しないといけないかもしれないかも」

ぐつと一息に紅茶を流し込んで返事も無く商品棚の奥にある倉庫へと入って…あ、ドアが粉碎されました。これ、店主が起きた時にもつとヤバイ状況になっているのでは…

あー…しかしさっきのおじさんはグロかったですねー…こう、一思いにズバツと言ってる割に執拗に切り刻んでいて。あ、なんだか気持ち悪く…

「コレで邪魔者は居なくなりましたね」

「邪魔者ですか…可哀想な扱いですよ…」

わざとらしく溜息をついてこちらを見やっていますが、なんです？私の顔に何かついてますか？

なんだか凄く真面目そうな顔して…

「イチコ、貴方は殺さないんですか？殺せないんですか？」

「え、はい？」

「私の障壁を素通りしたようですが…その割りに店主の死体を見ても全く動じてませんから貴方のスタンスを聞いておきたくて」

「…そんなの」

そんなの…決まってるじゃないですか、死体なんて見慣れすぎてますし。

「生きたまま狼に食べられてみれば分かるのですよ……どの辺りで死んでそうか、とか」

「……………」

「私が殺さなくとも殺された人は結構居るんですよ。ええ、もう指折り数えられるくらいには」

危険なんですよ？森のワールドは集落の外は無法地帯ですから。

あ、いきなり突っ伏してずっこけないでください。馬鹿なことを告白してるのは分かってますから。

「すみません、予想以上に下らない理由でしたから」

「どんな予想をしていたかは知りませんが……私は他人を直接倒せるほど強くは無いのですよ？」

「ええ、てつきり命令を下す人かと思っていました。時々ですが人任せに罪を犯す者も居ますからね」

「まさかの犯罪者扱いですか!？」

「ソレぐらい私達のギルドは他人から狙われているんです、裏切り者は居ませんけど」

クスクス笑ってますが裏切り者が居ないと言うのはギルド内完全掌握宣言ですか？恐怖統治ですか？

あ、返事は要りませんよ！聞いたら帰ってこれない気がします、無理やりギルドに入れられたりとか！

「イチコもギルドの仲間ですよ？」

「入った記憶がありませんが!？」

「レベル5以上のことを教えてあげたじゃないですか？」

「入ることと引き換えだなんて初耳ですよ!？」

「言っていないからね」

「最悪です!？」

「どうしても欲しかったんですよ」

「身体目当てですか!!」

「スキル目当てです」

「冷静に言い返さないで下さい!?!私が馬鹿みたいじゃないですか」

「すいませんが、私には既にシドが居ますから…恋人には」

「冗談なんですから突っ込んでくださいよ!?!」

「冗談はさておきそのスキルを持つ人が現状ウチのギルドには居ませんから確保しておきたい、と言うことですよ」

「……コレクターですか?」

「ええ、私のスキルの最終奥義に関係するといいますが…近くに居る人のスキルの数は多い方が良いでしょう」

「…どんなスキルであればそんなことが関係するんですか?」

「ナ・イ・シヨです」

軽くウインクして可愛い子ぶってますが正直キャラにあってませんね、ルシアさんならば笑顔で脅す方が嵌るか(略)

「企業秘密です」

「はい、教えないとしたらそんな感じですよね」

う、ルシアさんから先程より凶悪な殺意の波動が…!!!

「話を、進めますね?」

「どうかお進め下さいルシア様」

コレは敗北ではなく戦略的な一時撤退です、ええ…怖いから平伏しているわけじゃないですよ?

Side ???

シェアリングシティ・冒険者ギルド――

「お邪魔させて」「いただきます」

白と黒の小さな少女達がギルドのドア（粉碎中）をこえずかずかと上がりこんでいく。

「ン、お嬢さん達はウチに依頼かな？」

「依頼、とは違いますか」「GMより使いを頼まりました」

「我らは一刻も早く主様の元へ戻りたいのです」「手早くシド・ルシアの両名を呼んでください」

「GM？何で会社からわざわざ二人に…しかもプレイヤーが」

「貴方は何も」「知らないようですね」「埒が明きません」「シドとルシアを呼び出してください」

ヤレヤレと鏡のように揃えて肩をすくめて見せる少女たちに受付の男も肩をすくめる。

「あいにく今はお二方とも出かけてるよ、用事があれば伝えておくがどうするかね？」

「どこに」「出かけているので？」

「さあねえ…あの方達の気まぐれは今に始まったことじゃないから」

「あれ、ウサコンビじゃない。今日は遊び？」

にこやかにのんびりと廊下に行く扉から広間にガンマン（メイズ）が現れ、その場の空気が凍りつく。

「黙れ」「小娘」

「アッハッハ、また的にしてあげようかガキども？」

「落ち着いてくださいメイズさん、相手は子供ですよ、子供!!」
「大丈夫だつて、見た目ほど可愛いガキじゃないからさ」
「あくまで仕事、あの時大泣きさせた件は」「我らの意志ではなく、GMからの指示だった」
「ほら、それでもなんかムカつくことはあるじゃない? イイ感じに小動物が居たから、ついね」
「コイツ、泣かす」「むしろ*す」
「やるかい、ウサちゃん?」
「表に!」「でなさい!」

ぴりぴりとした空気を漂わせながら入り口から両者が一斉に飛び出て走り去っていく。

「いやいや表だなんて面倒な所じゃなくてさ、もっと本気出せるところ行こうよ」
「どこでもいい、今すぐ処刑する」
「<ラウ・ハーツ>で待ってるよ、シドたちも居るしね!!」
「始末しながら使いも果たせる」「ならば尚良い」

これが、<ラウ・ハーツ>の歴史に残る一戦になるとは...このとき誰も予想していなかったのです。

S i d e E n d

あら、今カメラさん何処に行つてましたか。
今の間はルシアさんにひたすら謝り倒してましたからちょうど良かったと言えは良かったのですが...
そんな様子撮られたくは無いですし(↑

「イチコ、聞いていますか？」

「はい、大丈夫ですよ」

「続きですが、私達のギルドはGMとの対決のために作られました」

「……対決？ただのイベントでは無いのですか？」

「イベントは会社側が起こすもので合ってGMとは何の関係もありませんよ」

「……会社こそGMですよね？」

「会社は会社、ただの管理職です。このゲームのGMは………実の所何処の誰だか分かりません」

「あの、そんなものよくゲーム会社が管理することを選びましたね？」

「恐らく社長の知人、または会社の誰かがGMだと思いますが………脳の開発ソフトだからですよ」

開発ソフト……え、脳年齢を調べるとか脳を鍛えるとかそういう……ものでしょうか？

「古い携帯ゲームを思い浮かべないでくださいね？」

「イヤデスネー、ソナワケナイジャナイデスカ」

「何を考えているか読み易くて助かりますよ、イチコ」

「プライバシーの侵害です……！」

「ではもう少しポーカーフェイスを心がけなさい」

「はう………難しいですよ、無表情は」

「続けますが、良いですね？」

「ドンドンどうぞです」

「じつは、このゲームは現実世界でスキルを使えるようにするプログラムなんです」

「………はい？」

「レベルが上がればイチコもいつかは現実でスキルが使えるようになりますよ」

「……………はい？」

「あ、とは言え現実で使えるのは自分で取得したマテリアルだけですからね？」

「あの、何を？」

「人のマテリアルはゲーム内だけですから奪って行っても無駄ですよ」

「いえ、まず頭が追いついてないのですけども」

「ですから、このゲームは超人開発プログラムと言うことです」

えー…この人は何を言ってるんでしょう…何処から電波を受けたのか、凄く危ないこと言ってますけど。冗談ですよ？さっきから危ないことばかり言ってますけど。

「冗談と思い込むのは勝手ですが…後悔しないで下さいね？」

イイ笑顔で見つめるの止めてください、怖いですから！

「脳がしっかり覚えこむのがレベル5を超える条件ですよ…プログラマからではなく、脳から出力される能力はゲームの枠なんか軽く飛び越えてしまいますから」

「ですけど。反則…なんですよね？」

「ええ、脳から出力されている間は刺激が逆に脳に返って行きます」

「つまり……」

「PLK領域と同じように現実世界に負担が掛かるんですよ」

「ですからさっきも使えないと！」

全力で其処は突っ込みをいれます。ええ、だってゲームの為に現実でまで怪我したくありませんし！！

「・・・いつかきつと使いますよ、だって凄く気持ちが良いですから」

「どんな理由ですか!?!」

「世界に選ばれるという優越感はソレはもうすばらしいものです、努力の末だと特に」

「ただのゲームですけどね!」

「現実世界でもそれなりに能力が使えるようになれば分かりますよ、その楽しさが」

「一生分からないと思いますですよ……」

「まあ思わせぶりに言っても全力を出すのが楽しい、そういう事ですけどね」

ホントにルシアさんたちが全力を出したらメイズさんとシドさんだけでも十二分に世界滅ぼせそうな気がします。ええ、「冗談抜きに」。

「イチコ、貴方もきつとレベル5を超えられますよ」

「そこまで経験値も溜めてませんし超えても使いませんけどね!」

「何も倒さずにレベル4まで登りつめてるでしょう? きつとその調子で行けば…いえ、案外既にレベル5ではないですか?」

「…………む」

「能力を知らないだけで貴方はきつと頂点まで登りきっていると。私の眼にはそう見えます」

「どれだけ私はガーデニング中毒だと思われてますか」

「イチコ、貴方じつは結構強いでしょう?」

「直接戦闘能力皆無の私がどう見れば強いんですか…」

じつと微笑をたたえたままこちらの眼を見つめてきます。

ルシアさんの眼を見るの、何となく何もかもが見透かされているように少し怖いんですね。

「間接的に倒すことなら出来るでしょう、そのマテリアル」

「ハハハ、まさかそんな……」

「次の争い、一度何も助けずにいますからそのつもりで居てくださいね？」

「死ねといえますか?!」

「ええ、レベル5以下なんですよ？それでしたら一時間後には復帰しますし」

「結構痛いんですよ!？」

「知っています。ですから試すんです、貴方が戦えるのを隠しているだけかどうか」

「先に言つては意味が無いと思うのですが」

「大丈夫ですよ。私のマテリアルが知らせていますから」

「…？何をデスカ」

「仲の悪い三人がたつた今この町につきました」

「はい…?」

「皆さんとくくくっても広範囲の技ばかり持っていますからね、先程のように地面からHPを吸って多少回復しただけではとてもじゃないですが追いつきませんよ？」

ニツコリと微笑む、天使の顔をした悪魔が其処に居ました。

「私にホントに死ねといえますか……!？」

人物紹介？かもです

スキル及び必殺技の説明は本編で出たときに行います。

+イチコ

ハーフエルフ レベル3「???」レベル5「???」

ハーブクリエイト レベル3「???」レベル5「???」

ソイルチャージ レベル3「ヘルズ・ガーデン」レベル5「???」
「」

今作の主人公でギルドのメンバーと関わりあったばかりに割を食わされる巻き込まれ役となる。

土いじりオンリーで自覚無くスキルを成長させていたために戦闘転用するのに苦労中。

じつは怒ると怖い子。

固有領域は土地に溜め込んだHPを振りまいて味方を回復する「ヘブンスガーデン」

+シド・イレイザー

鍛冶師↓「サムライソウル」↓刀神 レベル3「一撃の美学」レベル5「???」 レベル0「???」

転移↓「断絶」 レベル3「???」レベル5「???」

レベル5「???」

マテリアルクロス レベル3「強制同調」レベル5「???」

一番最初にイチコと遭遇した危険人物（笑）。じつはゲーム内最強で俺TUEEEEEしてる暇人。

しかし強くなることが大好きでGMとある取引をしてまだまだ修行中のプレイヤー。

・・・いくら強くなっても恋人であるルシアには全く頭が上がりない。

固有領域は斬攻撃力を増大させる「戦ヶ原」

+メイズ・バージェスト

「ガンズナイト」↓銃神 レベル3「チェイス・ショット」レベル5「チェイス・バースト」

黒犬獣

レベル3「???」レベル5「???」

ブレイク

レベル3「???」レベル5「???」

シドとコンビを組んでいる女ガンマン。ルシアからの命令でシドの見張り役として行動を共にしているが殆どの場合一緒になって騒ぎを起こす問題児。ウサコンビ二人とは仲が悪く、彼女らの主を巡って会ったたびに喧嘩している。

固有領域は所持射撃武器の残弾数を∞に変える「ブローケン・トリガー」

+スミカ

イマジネイト×3 レベル3「???」レベル5「???」

初登場時から寝込み続けているシドのリアル妹、現状特筆するほどのことはあまり無し。

始めたばかりの新米プレイヤー。

マテリアルが全て同じという珍しいタイプの人。

+ルシア・ヴァルキリー

生命礼讃

レベル3「絶対防御」レベル5「神衣」

変化↓「創造」

レベル3「???」レベル5「???」

精練騎士↓「戦乙女」 レベル3「???」レベル5「???」

【弱いのに絶対無敵】、敵のHPを絶対に0にしないという縛りプレイで戦い続けてきたベテランプレイヤー。シドと真正面からぶつかり合える、ゲーム内で頂点の一角。ただし恋人関係の解消と言う切れない切り札をちらつかせてシドをコントロールしているため中々争いにはならない。

固有領域は領域全てのHPをロックする「不殺空間」

+ライミィ・ライマー

スライムマスター	レベル3「???」	レベル5「???」
ミラートリップ	レベル3「???」	レベル5「???」
ドレイン	レベル3「???」	レベル5「???」

男も女も両方いけるお姉さん。普段は半分スライム状になってルシアの傍に潜んでいる。

メイズがお気に入りでちょっかいを掛けては追いかけてここに興じている。

固有領域は大量の身代わり兼回復役代わりのNPCを生む「スライムファクトリー」

+エグゼス・ライダー

パワー↓大力神	レベル3「???」	レベル5「???」
---------	-----------	-----------

「スピード」↓ハイスピード	レベル3「???」	レベル5「???」
---------------	-----------	-----------

固定化	レベル3「???」	レベル5「???」
-----	-----------	-----------

ビーストティマー	レベル3「???」	レベル5「???」
----------	-----------	-----------

とにかく走る走る。走って走って音速を超えるところまで目指してホントに超えたスピード狂。

じつはコイツがウサコンビの主でメイズとウサ達の喧嘩に頭を痛めている。

装備数、最大解放数が4つの男、体力だけは底無し。

固有領域はスピードのプラス補正強化を行う「加速領域」

+マシロ・ラビッツ&クロミ・ラビッツ

ラビットマスター レベル3「???」レベル5「???」

ブリザード&ボルケイノ レベル3「エレメント・スフィア」レベル5「???」

チェンジリング レベル3「???」レベル5「???」

いつでも主べったりなウサギコンビ。時折GMからの呼び出しを受けてお使いを請け負うがその間中はとても不機嫌。メイズとは主を巡って何度か大喧嘩をしたこともある。

主の前では二人揃って捕獲し挟み込んでベタベタし続けるほど主様LOVE。

眠る時は3人一緒に、お風呂も揃って等、主扱いされているエグゼスの心労の原因となっている。

二人セットで無ければ能力を全開に出来ない代わりに少し強力にセッティングされている。

+三馬鹿

それぞれ剣士、法術師、闘士のマテリアルしか持たないギルドのお出迎え役兼入団者のお世話係。

ルシアが忙しい場合のみお世話係を請け負う為、ラウ・ハーツから連れ帰った入団者は彼らの元でギルドのいろいろを学ばされる。

分からない貴方、ギルドに入っ
てすぐに「ダイナミックにお
帰り」
って言ってた彼らです。

十一個目 能ある鷹は爪を隠す、ですよ

大暴れする三人の中に突っ込んでいけ、と言われましても・・・
それ、遠まわしに死ねって言ってますよね？

ルシアさんはまともな人だと思っていましたが・・・やはり双剣士さん達と同類なのでしょうか。

えー、もう外では銃撃戦が始まってます・・・でれるわけないですけど。

正直なところ既に店の中を探索し終わったのか少年と双剣士さんも入り口のカウンターまで戻ってきていますし・・・押し付けちゃダメですか？

ほら、少年もそんな怪しげなブレスレット触つてないで助けてください。

「外がなんだか騒がしいが何の騒ぎだ？」

「ええ、どうやらギルドの方でお使い兎とメイズが鉢合わせたようで、

イチコが自ら止めに行ってくれるそうですよ」

「ああ、盗んだバイクで走り出せるくらいの若者がサバゲーでも始めたのかと思えば、あいつ等か・・・勇気あるな、お嬢」

「どう考えても双剣士さんたちのほうが向いてますですよ!？」

「あー、向き不向きで言えば俺なら楽勝だし確かに三人まとめてでも負けはせんがメンドイ」

「本当に危ないと思ったら流石に助けます、この私が責任を持つてね」

「それでも無理です!私一人ではガンマンさんとすら渡り合えるよ

うな力なんて出せませんよ！

・・・しかも三人だなんて」

「んー、そうは思うが・・・まあルシアの決定だしな。レベル5の三人相手だがファイト」

「しかもこの銃撃戦、どう考えても滅茶苦茶攻撃型スキルじゃないですかー！」

「後方支援とか間接的な攻撃しか無さそうなお嬢にはきついだろうなあ」

「ハイエルフであれば弓矢の超射撃もあるでしょうけど」

「私ハーフです・・・」

「グッドラック！」

「少年、少年は私の味方ですよーね！」

「ゴメン、僕ウサギさんたちとはちょっと会いたくないかな・・・」

「まさかの裏切りですかっ！」

少年の青ざめた顔を見て意気消沈していると後ろから肩を叩かれました。

振り返った先には双剣士さんが、真面目な表情で何処からか取り出したキセルを啜えて・・・

真面目な顔のほうが怖く感じるのは何ででしょうね？

「途中までは俺が手伝ってやる、無力化とかは自分で頑張れってことで」

「はい？」

「本当はルシアがお嬢を指名した理由も大体理解できるしな。さっきのキャッチの時に」

「理由・・・实力を見るってことなのでは」

「分かって言ってるならあの銃撃のど真ん中に叩き込んでやる」

「分かりません、分かってません！」

「・・・ぼ、オレはさっぱりなんだけど？」

「イチコが此処を出たら教えてあげますよ」

「行くぞお嬢、はよ止めんとまた街のワールドが割れちまうかもしれん」

「待つて、ナンデスカ、またつてー！？」

首根っこ掴まれて無理やり店の外に引きずられて・・・戦場に、戦場に立たせないで下さい！

「というか割れたんですか、ワールド。さっきの半分になってたワールドマップのあれですか？」

喧嘩で割れるって脆すぎませんか！

「いや、オレが制御ミスっちゃつてさー。メンゴメンゴ」

「私に謝られても！？って言うか双剣士さんが割ったんですか！」

「初めてのLv0解放の時にズバツと」

「・・・ばーかー!!」

改めて言います、この人馬鹿ですか。

「はいはい、さっさとどっちか止めるぞ」

* * *

「我らに弾丸など」「かすりもせん」

「まだ曲芸撃ちもマジックショットも使ってないのに余裕ぶっこく
とほいい度胸だよ」

「そのようなまやかしでは」「我らは捕らえきれない」

「いい気になってな、うさちゃん!!」

罵りあいが低レベルで続く中、三人のマテリアルによる流れ弾が徐々に町の風景を変え始めていた。

・メイズ【ガンズナイト レベル5】

・ウサ1【ラビットマスター レベル5】&【ブリザード レベル3】

・ウサ2【ラビットマスター レベル5】&【ボルケイノ レベル3】

街の迷惑を考えずに銃弾を撃ち込み続けるメイズはもとより、その街の壁を踏み台にして方向転換、また高高度への高速移動をしながら距離を詰めるウサたちの冷気と熱気が強度的に不安のある街を痛めつけていく。・・・あくまで本人達には一切躊躇の様子は見られないが・・・

全力掃射でなんとか接近を防ぐメイズと縦横無尽に駆け回りつつ徐々に近寄るウサ達はどちらも無駄に体力だけを奪われて膠着状態に入り始めている。

メイズはメイズで銃弾の細かい制御にまで気が回らず、ウサ達はウサ達で命中精度の上がる至近距離までつめる事が出来ず・・・一進一退。

一向に埒が明かない状況下でしばらくにらみ合いを続けた後、大きく後ろに跳ねて距離を取り、必殺技にて渾身の一撃を決めようとウサ二人が仕掛けた。

「ルシアたちが来る前に終わらせる」

「近寄れもしないでよく言うよ、ホント」

「街を思い」「全力では無かった」

「ソレ典型的なヤラレ役じゃない?」

「それは漫画の」「読みすぎ」

「ま、否定はしないけど。こつちももうすこし力入れて行くよ」
「どつちも手加減をしていたか」「最初から全力でよかったかもしれない」

「わざわざ全力を出すことも無いかなって思ってたんだけどね」

「「レベル3↓5シフト」」

「領域発動、【ブローケン・トリガー】」

スキルの宣言と共に、呼吸を合わせた二人から膨大な熱気と冷気が渦巻き始め、ガンマンを中心として街の姿が戦場へと書き換えられていく。

「どちらも全力で無かったのなら」「続けるのは無意味」

「じゃあ大人しく撃たれてよ？」

「否、渾身の一撃を見せてやる」「そちらも全力で来るといい」

「はあ、その自信もろとも撃ち抜いて上げるよ。うさちゃん」

* * *

店の中・居残り組――

「イチコ姉ちゃんに任せるなんて無理じゃない？結局シドが全部片付けそうだけど」

「それなんですがね。」

私の推測が正しいければ、ですが・・・きっとあの場の誰にも負けませんよ、イチコは」

「・・・攻撃手段がアイテム投げつけるだけなの？」

「そうですね、その能力だけなら不意をうってもしドには敵いません」

自分で持ち上げながら躊躇いなく切り捨てる様子に呆気にとられた。いきなり言っている事が違いすぎるんじゃないのかと…疑問の視線を向けてみる。

そんな視線を受けてルシアは指先を軽く振ってまだ続きがあるを示す。

「まず先程の会話からですが、彼女は直接戦闘力が皆無といいました」

「んー、さつき後方支援型って自分でも言ってたし普通じゃない？」

「いえ、少し特殊な条件でもあるのでしょけれど・・・直接と限定しましたから。」

つまり間接攻撃なら強力な何かがあるということでしょう」

「・・・勘違いだったらどうするのさ、ルシア姉」

「そもそも本当に戦闘力が無い事なんてまず無いんですよ。」

一つは戦闘用のスキルがあるはずですから」

「珍しいサポート特化とかじゃ・・・」

「自分の身も守れない酷なスキルしかない子ならば。」

エルフだとしてもGMが『街』の外に配置するわけがありません。生まれがNPCモンスターのいない『街』であるならともかく、凶悪な原住モンスターが生息する『森』のワールドではスキルの成長を望めるわけが無いのですから」

「やけに自信满满だね・・・」

「直接GMに聞いた事がありますから」

「・・・は？」

ふふふと天使のような、ソレで居て悪意を感じさせる笑顔を浮かべて紅茶に口をつける。

「気にしないで下さい。では二点目、私の防壁はともかくシドに勢いよく突撃して無事でした」

「受け止められただけで・・・何がおかしいのさ？」

「私もですが・・・本来シドもレベル1は常時発動ですからね。

私は歩く防弾チョッキ、シドにいたっては全身刃物のはずですよ」

「あー・・・そうだったけ？」

「・・・まあ貴方は普通に殴りあっていますからね」

「僕の『固定化』のマテリアルもパッシヴ（常時）だから正直効いた事無いし。だから知らなかったというか」

「うちの男達はこうしてこうも興味が無いことは覚えが悪いんでしようね」

「ほつといてよ・・・」

「何にせよ、私のスキルまで無効化した可能性がありますから戻ってきたら色々試さないといけませんね？」

「なんでそんな楽しそうなのさ、実は悪人だったら如何すんの？」

「あら、貴方には悪人に見えますか？」

「……自分で言っというてなんだけど全然。

アレが演技だったらここ叩き割っても良いね」

「優しいというか、抜けているというか、ですしね。イチコは大丈夫ですよ」

話は終わりだといわんばかりに椅子をガラスのあちら側、街道に向ける。

そしてもう一度カップに口を付けると、目を細めて最後に一言ポツリと。

「それに、シドが直接試すでしょうし」

* * *

両者の間で火花が散る中、もう一度戦場に変化が現れた。片や渦巻く熱気・冷気がそれぞれの前で球体状に集中し始め、

片や目前に大量の銃身を備えた兵器の塊が足元から浮上する。

スキルの影響下にある戦場をぴりぴりとした揃って睨みつけながら完全な球状へ変化したソレをシンクロした動きでガンマンに向け、勢いよく蹴りぬく。

「凍てつけ!」「燃え尽きろ!」「【エレメントスファイア】!!」

「

それに対しガンマンも浮上した射撃要塞に自分のマテリアルである拳銃を接続し、睨み合いの内にチャージした力を全て注ぎ込み、トリガーを力強く弾く。

「見せてあげるよ、L5の必殺・・・【チェイス・バースト】!!」

幾度も交差しながら迫る氷とマグマの塊を、追って放たれた大量の弾丸が包み込むように接触しようとしたその刹那。両者の間に人影が走りこんだ。

「・・・【マジンズ・ハンド】!」

その人影——背中——にイチコを背負い現れたシドが、剣気を溢れさせながら両腕から先を幾本もの魔刃と化して三人の必殺技をまとめて受け止め、無理やりに押し留める。

「よし、其処まで!。そろそろルシアがぶちきれぞ」

「あ————!!相棒そこ邪魔!!!!」

「シド、邪魔せずともその一撃で」「我らの勝利が決まる所だった!!」

「なにいつ!まだ全然僕の必殺技はこんなものじゃないっての、シドが出たから止めただけだし!」

「小娘には見せていない」「我らもコレで終わりでは無い!」

いさかいあう両者の間で疲れきった顔を隠さない——隠そうにも両手で必殺技を押し留めたままだが

——シドが背中に声をかける。

「・・・バカどもは放っておいて。イチコ、試しにその止まっている弾丸、触ってみろ」

「・・・ちなみに先程の推論が外れていた場合はどうなるのでしょうか？」

「安心しろ、それだったらそもそも俺の——この手の間（スキルの攻性防壁）を抜けねえよ。その時は後ろに引っ込んでろ」

「・・・当たっていたら？」

「そのスキル無効化でここら一体完全に沈黙させる」

「要約しますと？」

「あの三人をぶっ飛ばせ」

「・・・・・・・・・どうか外れていますように、ですよ」

恐る恐ると言った体でギヤリギヤリとシドの防壁（気迫？）に押し留められている弾丸に手を伸ばすと、その弾丸が指先に触れるか否かの辺りで消失した。

「あ・・・」

「おー、予想通り。でも範囲の狭さは予想以下、かね」

「ホントに・・・ですか」

「半信半疑だったが、見立ては正解だなあ」

「ちよつと外れていて欲しかったかもですよ・・・」

「珍しいじゃん。スキル無効化スキルなら」

「触れないと消せないって危険すぎませんか？」

「うむ、かなり危険だな。それにスキルじゃなくてそこら辺の煉瓦

拾って投げられたら危ないな」

「暢気に言いますね・・・」

「このヘタレ犬!」「泣き虫犬!」

「ウルサイ!相棒其処退いて、こいつら一回死なせるから!」

一発だけとは言え無効化をかけられたにも関わらず、

まだやかましく喚いている三人に向けてソレを上回る怒声を上げる。

「やかましいわバカどもがッ!ルシアのストレス、バカみてーに溜めやがってストレス発散に付き合う俺の身にもなれ!正直死ぬぞ、リアル側で」

「・・・ストレス解消用サンドバック?」「」

「違うわッ!何処からそんな発想が出た」

「苦労してるんだね、サンドバッ・・・相棒」

「ルシア、意外と」「危ない人なのか?」

「サンドバックじゃねッつの!」

シドは哀れむ視線を向ける相棒とスキルを拮抗させながらもぼそぼそと呟く二人を交互に睨みつけて牽制する。

「・・・え、恋人には暴力的なんですか?」

「お前まで言うか!」

「いえ、もうすこし大人しい人だと思ってましたから・・・恋人なら殴れるんですね?」

「人殺してねえだけで結構つええよ、アイツは・・・と言うか俺もそんなに殴られたりしねえから」

「でも・・・ストレス発散って」

「・・・」

「どうしました?」

「……………アイツのストレス発散は……三大欲求に向けられる、と言えば分かるか」

「はあ、三大欲求。食欲・睡眠欲・性欲ですか？」

「……かなり食って体力つけて、よく寝るために寝所に引きずり込まれて……………だぞ」

「えー、ご愁傷様です？」

顔を赤くしながら青くするシドに言葉だけの慰めをかけてマテリアを眺める。

気を取り直してその話題は流す。精神衛生上のためにも。

「えーっと……コレ、必殺技も使えるんですね？」

「あー、うむ。レベル4はあるの確認してるしなんかあるだろう、どいうのかは知らんが」

「このスキル無効化ってどっちの効果だと思います？」

「どっちって？って言うか何でもいいから早くしろ、腕が疲れてきた」

「ハーブクリエイトか、ソイルチャージか。むむむ……」

「土だろ土。ほら、スキルを養分として吸って土に還れ！！みたいな？」

「んうう……じゃあそっちの必殺技で！」

「保証はせんがな」

「怖いこといわないで下さいよ！？」

マテリアについて書かれたウィンドウをポップさせながら詳細を流し読みしていきます。

一度名前を見てからじゃないと使えないって不便ですね……必殺技は発声しないと使えないからなんですけど。

こんな手間をかけるんですから必殺技がもっと強力なスキル無効化でありますように……と願います、切に……ええ、切に！

スキル開放中の今、更にマテリアルに力と願掛けを込めて……

「ソイルチャージ レベル3【ヘルズ・ガーデン】発動、ですよ！」

スキル名の発声が響き、マテリアルが光り輝

—— かず、ぷすんと音を立てて終わる。

え、ちょっと！なんです、これ！不良品ですかー！？

「双剣士さん、何も起きません！！」

「ヘタレが……」

「あうあうああ……」

「ったく、ちょっと手助けしてやるからしっかり意識持つてろよ？」

「手助け……って、はい！？」

「ちよつと 失敗して街が瓦礫に変わるかも知れんが其処はソレだ！」

「全然良くないです！？」

「自力で使えない人間に文句は言わさん！」

「普通言いますよ！」

「【マテリアルクロス レベル3】 マテリアル解放^{バースト}」

「無視しないで下さい！！？」

「じつは俺のマテリアルは人のマテリアルをも強制解放できるのでだ
ーかつこわらいー」

「何も笑えませんか！」

「名前からして大方特殊能力もちの植物園だろ、スキル無効化あつ
たらいいなーつと」

「行き当たりばったり過ぎませんか！？」

「失敗したらその時はその時だろ？」

「せめて成功すると信じてください！」

「へい、【ヘルズ・ガーデン】強制発動ー」

「心の準備ぐらいさせてください！？」

「多分・・・HPを大量に消費するんだろうなあ。ソレかスキルポイントって言うかなんかのエネルギー？」

「はい？」

喋りながらシドさんの体から何かがマテリアルに流れ込んでくる気配が・・・シドさんの邪気？

「邪気なんて燃料にならんぞ」

「（びくっ）」

「俺のSPとHP流し込んでるだけだ。まあ・・・そう言うことなんでもし倒れたら後しっかりなー」

「へ？」

「ほら、HP全部流し込んだら倒れるだろ？」

「倒れるまで注がないで下さい！？」

「もし必要量が多かったら困るだろう」

「む、むむむ・・・！」

「ほれ、ちゃんと技名は自分で叫べ。吸い取る所から発動し始めてはいるがまだ出力が弱い」

「うー・・・双剣士さんが倒れたら、私的になるのでは」

「スキル無効化掛かったらどっちにしろ俺も吹っ飛ぶっての」

「・・・外れてたら後で一発殴りますですよー」

「当てられるなら好きにすればいいが」

「分かりました、ならどさくさに紛れて襲われたとルシアさんに伝えておきますね」

「てめっ!？」

顔を真っ青にして受け止めている攻撃を軋ませるシド。

その姿を見ながら自分のマテリアルにイメージを集中する・・・ソイル・チャージ、私の力、土にエネルギーを溜め込む様を、其処から生え出でる生命力を。

「ヘルズ・ガーデン」発動！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2903p/>

奇妙な物語 どこか間違った僕らの<世界>

2011年11月11日19時40分発行